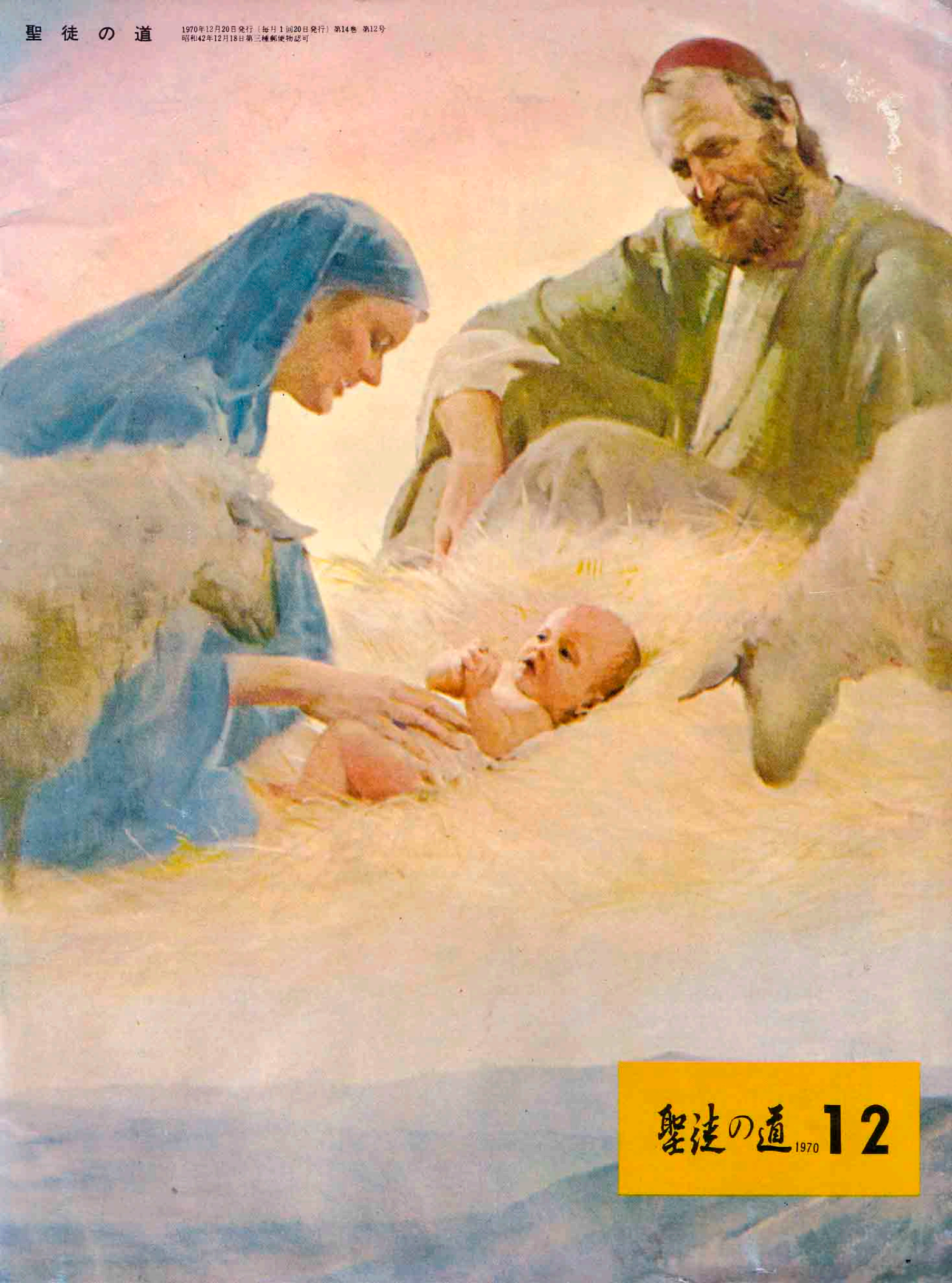
聖 徒 の 道
1970年12月20日発行（毎月1回20日発行）第14巻 第12号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可



聖徒の道 1970 12

心の糧

十二使徒評議員

ハワード・W・ハンター長老

大方の人々はしっかりとした道徳的な掟に従っていると思う。彼らは次の大きな道徳律により治められている。すなわち，他人にも自分にも最善を願って生きることである。確かにこれは，立派なことであり，もしだれもがこのような道徳上の責任をまじめに考えるなら，この複雑な社会関係はよりよいものになるであろう。

道徳理念は正しい政府，博覧会の定則，公正な法制などの基いであり，またすべての道徳，社会，経済制度の基いである。

我々は道徳的な掟にしっかりと従うことに賛成し，社会は高い完成の域に達し，現代の問題の多くは解決されるであろう。しかし，人生の目的を達成するのに道徳だけで充分であろうか。死後の生活を信じない人々にとって，必要な行動をし，責任を果たすには道徳だけで充分であるかもしれない。また来世を信じている人の中にも，道徳だけで救われると思っている人があるかもしれない。神の他の戒めを守らずに救われるというこの考えは正しいであろうか。

道徳と宗教の間には大きな違いがある。道徳のみで生きる人と真の宗教によって生きる人との間にも相異がある。我々は道徳を必要としているが，真の宗教には，はるかに高い真の道徳が含まれているのである。真の宗教は卓越した存在者を信じるところにその基いを置いている。キリスト教は，永遠の父なる神と御子イエス・キリストおよび聖典に含まれる主の御言葉を信じることに基いている。それはただ単に神を信じることではなく，信じることを実行することである。ジェームス・E・タルメージ長老は言っている。「人はたとえ神学の道に深く通じていても，宗教的人格，更に道徳的人格にさえ欠けていることがある。もしも神学を理論とすれば宗教は実践であり，神学を教訓とすれば宗教は模範である。」（信仰箇条の研究P．7）

キリスト教徒にとって真の宗教は，神への実際の信仰により表わされるものであり，我々が，行動と行ないの責任を神に対してとらなければならないと悟ることにあるのである。

―― もく じ ――

予言者のことば
主は約束されている……大管長 ジョセフ・フィールディング・スミス… 313
心の平安……スペンサー・W・キンボール… 315
キャミリア・アイリング・キンボール
すばらしき女性……マーベル・ジョーンズ・ガボット… 316
母親よ！そこにいなさい……リチャード・L・エバンズ… 319
石に捕われし像……ポール・ジェームス・トスケイノー… 320
福千年……アルビン・R・ダイヤー… 323
管理監督のページ
学ぶこと……ジョン・H・バンデンバーグ… 327
障害を取り除く……マリオン・D・ハンクス… 328
ヨセフから大工仕事を学んだ人……S・デルウォース・ヤング… 329
自分自身へのおくりもの……ランディ・スエンソン… 330
お金で買えない贈り物……エリノア・ノールズ… 332
聖餐の聖句……日曜学校…… 333
だれを信用できるか……ウィリアム・M・テール… 334
この日，あなたに……故 デビド・O・マッケイ大管長… 336
伝道部だより…… 338

子供のページ

大きな，すばらしい約束……マーガリ・S・キャノン…42
アマゾンでのクリスマス・イヴ……ヘイゼル・スワンゼン…43

12月のこよみ

5日
ブリガム・ヤング，教会の第2代大管長として，選ばれる。1847年

9日
L．D．S．日曜学校が組織さる。ソルトレークにて。1849年

18日
ジョセフ・スミス・Sr，初代大祝福師として聖任さる。

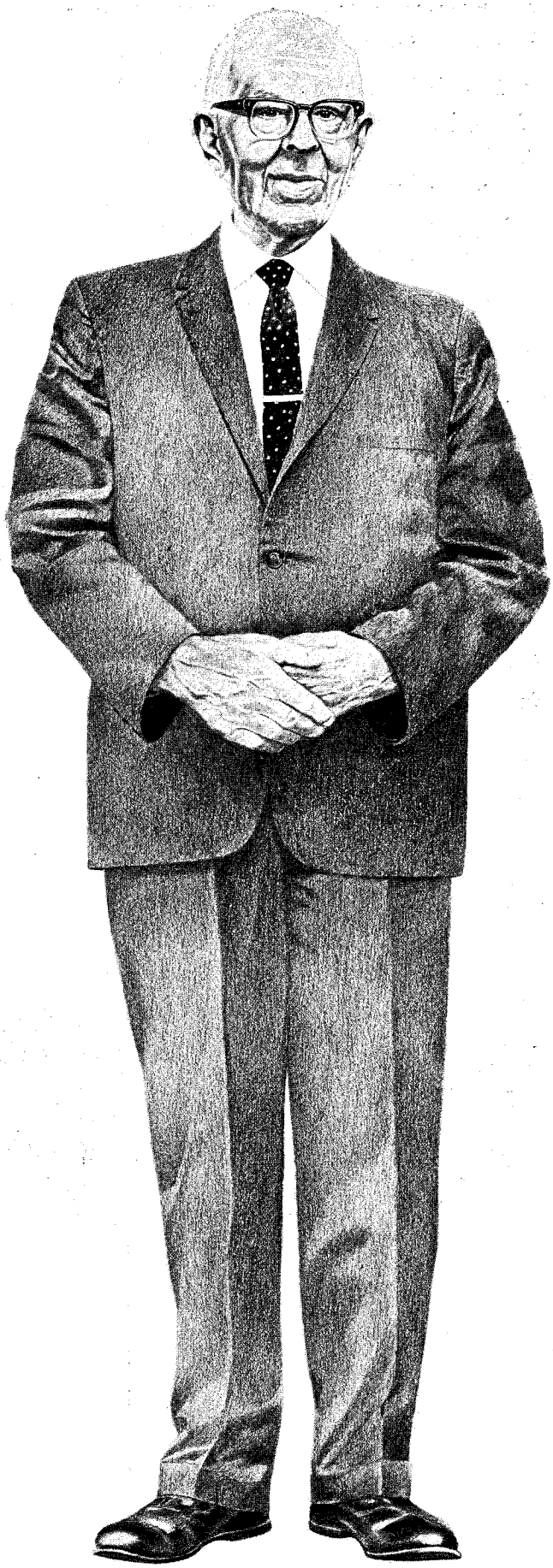
23日
ジョセフ・スミス・Jr，初代大管長生まる。バーモント州，シャロンにて。1805年

25日
クリスマス

27日
ブリガム・ヤング，教会の第2代大管長として支持される。1847年

今月の表紙

ニューヨーク世界博覧会のモルモン館に展示された，あの有名な十二使徒を聖任するキリストの絵の作者，ハリー・アンダソンは，後にソルトレーク市テンプルスクエアの訪問者センターから8枚の絵を依頼されました。それらの絵は各神権時代の予言者たちの生涯における重要な出来事をあらわしています。今月の表紙はそれらの絵のひとつでイザヤ書7章14節，9章6―7節にもとづいて描かれたものです。主が平和の君の誕生についてイザヤとアハズ王に語られたよろこびのおとずれを，イザヤは二人の証人の前で記録しています。



主は約束されている

大管長
ジョセフ・フィルーディング・スミス

これはまさしく人がイエス・キリストの生誕を祝うために選んだ季節である。確かに，我が長兄の肉体の誕生は世の歴史上非常に重大な出来事であった。

神の御子は自らの模範によって，永遠の生命への道を我々に示すために地上に来られ，自らすべての罪を解き放たれたのである。**我々は神の律法を知らないと言って，それらを犯したことを言い逃れることはできない。**

我々は神の事柄に無知ではない，なぜならそれらはアダムの時代から現在に至るまで我々に知らされてきて，聖典に記されているからである。神の御許から天使が世の初めより地上に送られて，人の救いに欠くことのできないすべてのことを人々にあらわし，心に植えつけて来た。これらの戒めをもって，我々は至高者にこたえる責任があり，従うべき義務を負っている。

この救いの計画における基本的な諸原則は次のようなものである。

1. 天父なる神，御子イエス・キリストと聖霊に対する信仰。我々はこれらの方々を天をすべたもう権威として受け入れねばならない。神会はすべてを治め，全能，公正，真実でありたもう。

2. 我々はキリストの無限の贖罪を受け入れねばならない。我々は，キリストがアダムの咎と悔い改めを条件として個人の罪を贖う救い主であると信じている。

3. 我々はすべての罪を悔い改め，全身全霊をもって神に仕えねばならない。

4. 我々は，福音の諸儀式を執行すべく，神に召され権能を授けられた者から，罪の許しのために水に沈めらるるバプテスマを受けねばならない。

5. 我々は権能を持つ人々の按手により，聖霊のバプテスマ，すなわち我々を真理へ導く真理と予言の「みたま」を受けねばならない。

6. 我々は思いを尽し，心をつくし，力を尽して主に喜んで仕え，終りまで主の戒めを守らねばならない。

救いはこれらの律法に基づいており，祝福はすべての人々に約束されている。これらの条件は重く厳しいものではなく，もし人々が贖い主によりたのみさえすれば弱き人々のうち最も弱き者でもできることである。

天父は御子を通して，天父の持ちたもうすべてのものは，その戒めを守る人々に与えられると約束されている。**彼らは知識，知恵，力を増し，完全の域に達する日がおとずれるまで恵みに恵みを加えられるであろう。**彼らは全能者の栄光と祝福により**創造者**となるであろう。あらゆる力と主権と権力が彼らに与えられ，彼らはこの偉大な祝福が授けられる唯一の民となるであろう。

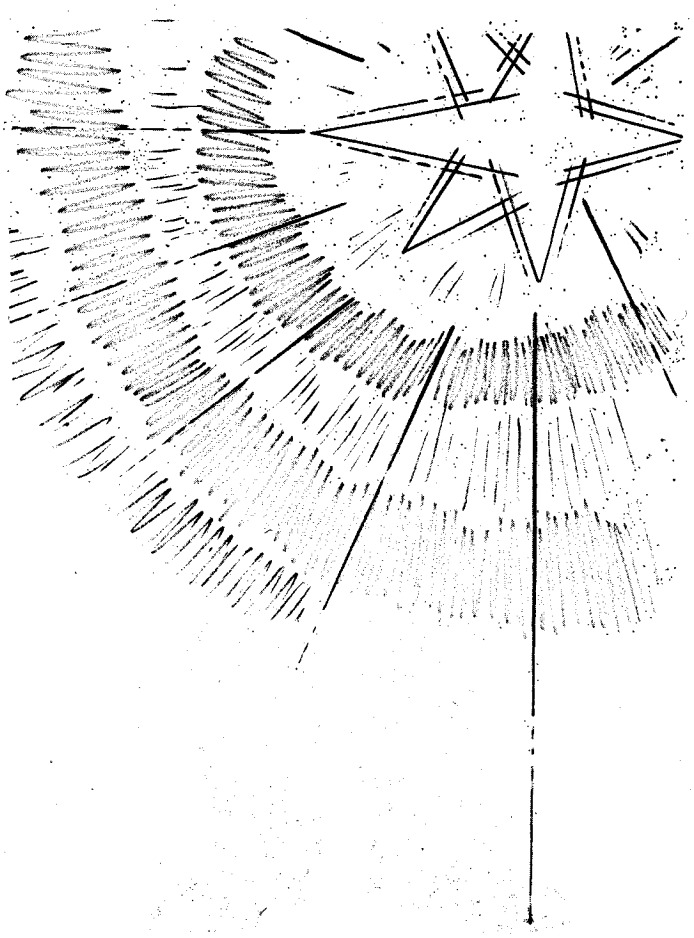
天父の持ちたもうすべてのもの，その約束の大いなる範囲を死すべき人間はほんのわずか理解し始めるにすぎない。

天父の持ちたもうものを得るには，イエス・キリストの誕生の夜，野原にいた羊飼たちのように謙遜でなければならない。

「すると主の御使が現れ，主の栄光が彼らをめぐり照したので，彼らは非常に恐れた。御使は言った『恐れるな。見よ，すべての民に与えられる大きな喜びを，あなたがたに伝える。きょうダビデの町に，あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。』すると，たちまち，おびただしい天の軍勢が現われ，御使と一緒になって神をさんびして言った，『いと高きところでは，神に栄光があるように，地の上では，み心にかなう人々に平和があるように』。御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき，羊飼たちは『さあ，ベツレヘムへ行って，主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」（ルカ 2:9—11，13—15）

この約束を受けるために，我々は次のように言って東方からやって来た博士たちのように賢くなければならない，「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは，どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので，そのかたを拝みにきました」（マタイ2:2）

この季節にあたり，私も全世界の聖徒たちと共に独り子の誕生を感謝している。このクリスマスがみなさんにとって最もすばらしい時となり，みなさんが主に仕え，戒めを守る時に天父が続けてみなさんを祝福したもうよう祈り奉る。



心の平安

「神はあなたがたを平和に暮させるために召されたのである」
（Ⅰコリント7:15）

十二使徒評議員会会長代理
スペンサー・W・キンボール

平安はこの世から消えてしまったのだろうか。静けさは忘れられた過去の存在なのだろうか。そして律法や秩序は思い出の中にしかないのだろうか。いったい平安はどこにあるのだろうか。

大切な平安を私たちはどうしたのだろうか。主はこの平安を，消えることない宝としてまた祝福として私たちに与えられた。「わたしの平安をあなたがたに与える。」（ヨハネ14：27）と主は言われた。主は平安の公式を編み出していろいろな成分を混ぜ合わせ，私たちに代価なしに与えて下さった。

また「わたしは平安をあなたがたに残して行く。」と言われ，私たちがふさわしくある限り永遠に続く宝すなわち祝福として与えられた。この平安は消えたりなくなったりする種類のものとは違うのである。

では，このように主の寛大な御心で与えられた大切な平安はどこにあるのだろうか。この世の取るに足らないことに没頭しているうちになくしてしまったのだろうか。

主は言われた。「あなたがたは心を騒がせるな。」私たちが平安を得るすべを失なったら，苦悩の深みにおぼれるであろうことを，主はよく御存知であった。平安と苦悩，この2つのうち片方だけを与えられるとしたら，私たちはどちらを選ぶだろうか。1つはこの世から，もう1つは天からもたらされるのである。

「おじけるな。」

平安が喜びをもたらすというのに，私たちは苦悩を受けるであろうか。同胞である旅人に向かって扉をかたく閉ざさなければならないのだろうか。同胞のために道は安全だろうか。そして混乱や恐れもなく，子供は笑い，若人は歌い，家族は進歩しているだろうか。

恐れが安全にとって代わったのか。警察を強化しなければならないのだろうか。悪人は保護され，一方犠牲者は償いも受けずに苦しまなければならないのだろうか。

真犯人は自由に逃げているというのに，無実の人を鉄格子の部屋に閉じ込めているのだろうか。主はどんな平安を私たちに与え，残していかれたのだろうか。

「わたしが与えるのは，世が与えるようなものとは異なる。」弾薬や大砲，爆弾などから得られるものでもなく，刑務所や警察，裁判所，弁護士から与えられるものでもない。これらは世のものである。

「わたしにあって平安を得るためである。」（ヨハネ16：33参照）と言われた時，主は私たちが主の如くになり，その戒めを実践し，同胞を愛して主の歩みをたどるべきことを示された。これこそ，主の言いたもう「わたしの平安」である。

「平安はどこに？」私はかつて何ものにも動じないこの平安をまのあたりにした。

これから話すその美しいドイツ女性は，スイス神殿の衣類を扱うカウンターのかたわらに立っていた。ちょうど新しい神殿の初めてのセッションで着た神殿衣を返すところだった。背は中位で，彼女の落着いた風格のある態度が印象的であった。

彼女はドイツでも，第二次世界大戦中最も手痛い被害を受けたところに住んでいたため，最も悲惨で恐ろしい戦争を通りぬけて来たのだった。まだ40代だというのに髪には大部白いものが混じり，身体にもいくらか戦争の傷あとが残っていた。顔に刻まれたしわはぬぐい去ることのできない苦痛と怒りと悲しみとを物語っていた。

恐ろしいナチのサイレンが町に鳴り響くと，彼女は暗い片隅にもぐり込んだ。わずかの魚を買いに市場へ行く時は暗がりを選んで歩き，高いパンを買うために何時間も列を作った。

最愛の夫が戦場へ引き立てられて行った時には，一抹の希望と恐怖の混じった気持で別れを告げた。爆弾はものすごい音をたてて容赦なく落ち，恐ろしさで身をかがめながら，いつ果てるともなく次から次へと続く爆撃にじっと耐えていた。

彼女は愛する夫からの便りと消息をいつまでも待ったが，それは徒労に終わってしまった。日を重ね，月を重ね何年もの年月が過ぎていった。戦争が終わり，もう苦しみや不安な思いを味わわなくてもよい時がやって来たと思った時，死傷者や行くえ不明者の名簿が出された。そして，愛する夫の名前が死者の名簿に載っていたのである。

夫の遺体がどこにあるのか知る由もなかった。しかし，もしやというあてのない不安だけは去って行った。未亡人となった彼女は，今や現実の重みと運命に立ち向かわなければならなかった。この世の生涯を一人で，そして永遠に生きて行かなければならなかった。試練と恐怖と苦しみの歳月にあって，福音だけが彼女のよりどころであった。再び夫に会えるという約束が成就されることを目標にして，その時彼女は生きて行くのであった。いつか神殿が建てられた時にはその備えができているに違いなかった。

そして今，彼女はこのベルンに建てられた新しい神殿に来ているのであった。最近支部で彼女に会ったが，希望に溢れていて何かをやり遂げたという感じであった。身代りの儀式も済ませ最愛の夫とも結び固めを終えていた。顔のしわもやさしさを見せていた。私に語りかける彼女の声には美しい響きがあった。

必要であれば戦争もいといません。爆弾は炸裂し，地を破壊するでしょう。食べ物を得ようと長い行列ができ，がれきの山ができることでしょう。銃は火を吹き，死は身近かに迫まろうとも必要とあらば何物をもいといません。覚悟はできています。私は神を知っています。主イエス・キリストを愛しています。愛する伴侶と永遠に結び固められた私は，どんなことにも耐えられます。私は平安です。

彼女の態度には威厳と誇りとが感じられた。彼女は平安のうちにいたのである。そして私には主のみ声が聞えるようであった。

「ああ，麗しきかな，平安の教えを宣べ，良きおとずれを告げる者の足は」（欽定訳ロマ10：15）

「神の国は飲食ではなく，義と，平和と，聖霊における喜びとである。」（ロマ14：17）

キャミリア・アイリング・キンボール

すばらしき女性

編集員
マーベル・ジョーンズ・ガボット

〔写真説明〕

上．1910年コロニア・ジュアレで友だちと共に。左から4番目がキャミリア。

中．ユタ州ヒンクレー，ミラード学院の家政科クラスでのキャミリア・アイリング。

下．4人の子供と初孫に囲まれたキンボール長老と姉妹。

「私の生涯で最も大切なものは家族だと思っています。私たちの人生は子供たちのことでいっぱいです。子供たちの喜び，悲しみ，成功や失意でいろどられています。すべて私たちにとっては貴重なものです。私は家族すなわち孫たちやいとこたちとも疎遠にならないようにと願っています。私が子供の頃には家族はもっとしっかりと結びついていたものですが，近頃ではもろくなってきているようです。友人に対すると同じように，身内の者とも親しくならなければと思います。努めて知り合うようにしなければ自分たちの家族とも心が通じ合わないものです。」これはキャミリア・アイリング・キンボールの言葉である。

キャミリアのたぐいまれな幼年時代

左. キャミリア・アイリング・キンボール
下. 1937年7月，イタリアのポンペイを訪れたスペンサーとキャミリア・キンボール。

右. メコシコ，コロニア・ジュアレにて1歳のキャミリア。

上. キャミリアと弟のヘンリー，妹のメアリー。

上. 「若いカップル」スペンサー・W・キンボール夫妻

は，いとこや祖父母，両親，その他すべての家族に恵まれ，お互いに心の通じた者同志による今も忘れがたい環境にあった。彼女はメキシコのチファファ，コロニア・ジュアレで，エドワード・クリスチャン・アイリングとキャロリーン・ロムニー・アイリングの両親のもとに生まれた。そしてピエドラス・ヴェルデ川でバプテスマを受けた時，彼女の記憶によると水面にはうっすらと氷が張っていたそうである。家族は1910年頃まで川の東側に赤レンガの家を構えて住んでいた。川をはさんで小さなコロニア・ジュアレ村があった。キャミリアはワード部内の礼拝堂で行なわれる学校へ通った。町の人々に時を告げる教会の鐘の音を聞いて，子供たちは学校へ行った。(「私は今でも教会の鐘の音を聞くと，郷愁にふけってしまいます」と彼女はなつかしそうに言うのである。)

ピエドラス・ヴェルデ川につり橋がかかっていて，学校が終るとキャミリアは，川の西側に住むオーガスタ・アイビンスの家にこの橋を渡ってよく遊びに行ったものだった。日没までには家に帰るようにと言われていた。太陽はアイビンス家側にある西の山に少し早くかくれるため，急いでつり橋を渡って行けばキャミリアは日没前に家に着くことができた。たまにのんびりしていると，「お母さんからピシャリとやられた」そうである。

この「お母さん」は，マイルズ・パーク・ロムニーとキャサリン・ユッタム・ロムニーの娘で，名をキャロリーン・ロムニーと言った。セント・ジョージで生まれた彼女は，家族と共にアリゾナのセント・ジョーンズに移り住んだ。そこでは，父親がオリオン・エラという新聞の印刷業を営んでいた。後年家族はメキシコにやつて来た。キャミリアの父，エドワード・クリスチャン・アイリングは，ユタのデキシー騒動を鎮めるため，1862年ユタ州セント・ジョージで召集されたヘンリー・アイリングの息子である。1887年，祖父ヘンリー・アイリングは家族を率いてメキシコへやって来た。

ある日のこと，マイルズ・ロムニー監督は，若いエドワード・アイリングを，お祭りのお客さんとして家に連れて来た。2人が馬に乗ってやって来た時，キャロリーンと母親は庭で花を摘

んでいた。キャロリーン・ロムニーとエドワード・アイリンが初めて目と目を交わしたその時から，キャミリアの未来は初まっていた。「犠牲に伴うもの」という意味をもつキャミリアの名前は，このすばらしき女性の全生涯が世に知れるようになってさらに意味深いものとなった。

キャロリーンとエドワード・アイリングのもとで，キャミリアは幸福な幼年時代を送った。コロニア・ジュアレの村では，遠足やパーティー，シエークスピア劇，毎週のダンス，あるいは学校行事が家族ぐるみで行なわれた。

キンボール姉妹はこう思っている。「馬車の時代からジェット機時代まで生きていられると，いろいろいい事がたくさんありますわ。比較してみて初めて，人間はほんとうの感謝の気持を抱くものです。何事も家族が協力し合い，隣り近所が1つの大きな家族のようだった幼ない頃に戻れたら，すばらしいですね。」

彼女は，自分たちで劇やカンタータ（声楽曲）の脚本を書いた時のことを今でもおぼえている。自分たちで演出した劇は最高に楽しく，「祖父のロムニーはすばらしいシェークスピア俳優でしたわ」と彼女はその思い出を語っている。「同じ年頃の子供たちと一緒になって，自分たちの手で楽しみを造り出していきました。」あらゆる意味で才能を伸ばす機会に恵まれていた。

こうした今ではめずらしい程親密な人間関係の場であった植民地も，メキシコ革命のあおりで打撃を受けた。キャミリアの思い出はゲリラ戦へと続いていく。当時盗賊が町に入り込み，雑貨屋を襲っては物を盗んだり，放牧地で動物たちを殺したりしたというしたい放題のことをしていた。1912年の夏には，聖徒たちは家を捨てなければならなかった。彼女はこの時のことを，「あまりにも突然に，そして何の準備もないままに家を捨て，安らぎを捨てた悲しい時でした。」と言っている。

父親は2週間ぐらいでまた戻って来られると思い，出発の前日にびんづめにした100リットルのクロイチゴを玄関の床の下に隠しておいた。

当時，長女のキャミリアは17歳だった。エルパソでの夏と，婦人子供用の混雑したキャンプ，ひどい暑さ，政府から支給された食物などを思い出しながら，彼女はこう言う。「婦人と子供のために，赤十字が毎日配給を持って来てくれました。私は小麦とかんづめのサケにあきあきしてしまいました。」10月までに，男性たちは大切な財産を残してメキシコをあとにした。

メキシコ政府による賠償の一環として，身元を引受けてくれる友人や親戚のあるモルモン教徒に，合衆国内のすべての州に行ける無料鉄道切符が支給された。キャミリアは汽車で叔父の住むユタ州プロボへ行き，そこからブリガム・ヤング大学附属高校へ通った。（彼女はジュアレ・ステーキ部学院で高等部を2年まで終えていた。）

キンボール姉妹は，プロボで初めて学校へ行った日のことを笑いながらこう思い出す。ちようどスカートの寸が変わった頃で，彼女がエルパソから持って来た新しい洋服と上着はみな短かく，その秋は足首までの長さにしなければならなかった。新しい寸の洋服を作るため，母親が洋服布地を送ってくれたのはそろそろクリスマスという頃であった。しかし上着は短かいまま着なければならなかった。「今は笑っていられますが，当時17歳の私にとってあんなに悲しいことはありませんでした。」

一生けん命に何かをした時期であった。キャミリアは下宿代や学費を払うために何時間も働いた。昔のような何も心配のない幸福な生活は，今や過ぎ去ってしまった。しかし彼女は，幸福な生活は待っていたのではいくつになってもやって来ないということを知ったのである。彼女はこう言っている。「年々，そして少しずつ生活はよくなっていきました。そしてついに私たちは幸福な生活を実感として味わったのです。幸福な生活は見つけるものではなく，作り上げていくものです。」

キャミリアは自分の力で幸福な生活を築いていった。1914年，高校卒業と同時に大学の家政学の課程を修了し，教会の学校で教える特別許可を得た。ひと夏をバークレイのカルフォルニア大学で過ごし，サンフランシスコの世界博覧会を訪れた。その後彼女は，アリゾナ州サッチャーのギラ学院とユタ州ヒンクレーのミラード学院で教鞭をとった。また1年間ユタ州のローガンにいて，ユタ州立農業大学（現在のユタ州立大学）に通った。1917年11月16日，彼女はスペンサー・W・キンボールと結婚した。

キンボール家はアリゾナに居を構えそこで4人の子供に恵まれた。キンボール長老がロータリークラブの地区代表を勤めていた関係から，すばらしい旅行を数多く経験することができた。その中には，1937年のヨーロッパ13ケ国訪問と，パレスチナへの3度の訪問がある。それから家族はアリゾナのサフォードに越した。時に1943年彼らは「自分たちの人生を変えた運命の電話を受けとり，スペンサーは教会の十二使徒評議員の1人に選ばれた」のである。こうしてキンボール家はソルトレーク市に移り住み，新しい生活が始まった。

キンボール姉妹は，会社や社会，あるいは教会で多忙な生活を送る夫のために，絶えず内助の功を発揮してきた。またどこにいても知性にあふれ，霊的な働きをなしてきた。キンボール長老と姉妹は，1958年6月マスターMメン・ゴールデングリーナー名誉賞を受けたが，その時キャミリアに与えられた賛辞は次のようなものである。「彼女は人に対し，決して飽くことな

き奉仕を続ける。特に忘れられた人々に対して。いつも福音の光を輝かせている。彼女とよく知り合う機会のある者こそ，実に恵まれた者と言えよう。厳格な面と親しみのある面，またひかえめなところと何でもそつなくこなす積極性とが奇妙に彼女の内面でつりあいを見せ，たぐいまれなすばらしい人間性を造り上げている。」

キンボール姉妹はいつも喜んで自分の才能と教育とを捧げてきた。幅広い奉仕活動を通じ家政学に貢献してきた。そして彼女の本に対する深い造詣と幅広い読書とは，図書館の発展と進歩を助けてきたのである。東部アリゾナ婦人連盟会長としての彼女はつねに会員たちを励まし導いた。またガン協会で働いたり，テレビの教育番組に出て名著を紹介してきた。

彼女の趣味で筆頭にあげられるものは読書で（彼女の朗読には定評がある。），２番目はすばらしい手芸である。（刺しゅうとレース編みでは州祭賞を取っているほどである。）家族との旅を愛し，また世界中の銀製スプーンや小立像を集めている。

キンボール姉妹は十代の頃に，母親ぐらいの女性を集めた成人クラスを教えたことがあった。彼女は，料理や家事だけでなく，大胆にも子供の教育までも教えられると思っていたそうである。50年を経た現在，自分の子供たちを育ててみて，子供の教育について人に意見を述べるなどというおこがましいことはできないと言っている。しかし，彼女が育て上げたすばらしい家族が事実を物語っている。その子供たちとは，スペンサー・ルバン・キンボール，オリーブ・ベス・キンボール・マック，アンドリュー・アイリング・キンボール，そしてエドワード・ローレンス・キンボールである。彼女はこう言っている。「いい子供たちに４人も恵まれて，私たちは幸せだと思っています。皆それぞれに大学や大学院で学位を取り，すばらしい伴侶と神殿結婚をしているんです。それに，すばらしい孫が27人もいるんです。」

便利になった今の世の中に感謝しています。それに近代科学がもたらした驚くべき進歩にも感謝しています。」キャミリア・アイリング・キンボールはさらにこう続ける。「しかし，私はそういった便利さや進歩が即座に幸福につながらないことを知っています。過去の忙しかった自給自足の時代には良いところがありました。当時の質素で素朴な生活は，家族でキャンプをしたり，田舎を訪れることでいくらかとり戻すことができます。そして，ぜいたくがあたりまえで，絶対的なものだという観念をうち破り，私たちに反省の機会を与えてくれます。幸福は人が得るものです。月や星へ飛ぶことではなく，人生をしっかりと歩むことに満ち足りた思いを見い出すことです。」

母親よそこにいなさい

リチャード・L・エバンズ

しばらく前のこと，窓の外の奥まった所にある割れ目に粗末な巣を作っている二羽のはとを見つけた。えさを捜すのもやっとの寒さのきびしい冬であった。そこに母親のはとがいた。近づいていくと私から巣を守ろうと立ちはだかっている母親のはとがいた。二羽の小さなはとが殻を破って生まれてくるまで，あらゆる自然の力と戦いながら，大事にあたためてきたのは母親であった。その小さなはとが自力で飛べるようになるまでえさを与えて育てたのも母親であった。そこにいてたゆまぬ働きをしている母親のはとに，私は最大の敬意を払わずにはいられなかった。母性本能に素直に従うこのはとはなんと賞賛に値すべきものであろうか。いついかなる時でもどこにあっても困った時にはそこに母親がいた。子供が学校から帰ってきて「お母さんどこ？」と尋ねる時，そこにいて帰りを待っていてくれる母親を見つけることはなんとすばらしいことではないか。子供の人格や性格そして将来を形づくる母親，家庭を平和な楽しい場にし，子供の話に耳を傾けて経験を共にしながら標準を教え，忠告や励ましを与えて子供に関心を持つ母親。母親は家庭の中心である。謙そんな信仰深い母親，彼らは愛し奉仕し，美徳，名誉正直を静かに教え，約束を守り，誤ちを理解し，自己を捧げるほどの非利己的な心と愛とを持って日々の務めを果たしているのである。家にいて帰りを待っていてくれる母親は子供に大きな安心感を与える。だれもいない家に帰って来る子供は多くを失なっている。「お母さんただいま」「お母さんどこ？」母親よ，そこにいなさい。あなたの存在は子供たちにとって常にそして永遠に祝福となるのである。母親よ，そこにいなさい。神が母親とその思い出とを祝福したもうように。

石に捕

フイレンツェの町はゆるやかな起伏を見せているタスカニーの山々に囲まれ，アルノ川のほとりに位置している。

暑い夏のある日，私と同僚の宣教師がふと気づくと，フィレンツェの中心にあるシグノリア広場に来ていた。

私はその時のことをよくおぼえている。空は晴れわたり，太陽は金貨のように輝いていた。広場を歩く私たちの目の前に石だたみがまるで大理石でできた大きな一枚のパズルのように広がっていた。歩道のきれいな敷石が足に暖かく感じられたのをおぼえている。

広場はいつものように，思い思いの服装をして地図や案内書や写真機を重そうに抱えている旅行者でいっぱいだった。いかにもけばけばしい光景であった。旅行者は，まわりにそびえ立つ芸術性豊かな記念碑よりも，むしろ足もとに寄って来る飼いならされたハトの方に気をとられているようだった。

左手には，冷たいしぶきを放っている大きな泉の中央に，筋骨隆々とした海神ネプチューンの像が堂々とそびえていた。手に三つまたのやりを持ち，やさしいまなざしで旅行者やハトをじっと見つめている。

はるか右手の建物の陰に，石のやりが見えた。ここには古代ギリシャとローマの戦争や神話が再現されていた。

広場にはヘラクレスの像もあり，ウフィッツィとパラッツォ・デラ・シグノリアの２つの美術館の入口に立っていた。後者の建物はフィレンツェ様式の典型であり，タスカニーの青空にひときわ高くそびえるその有名な石塔は，素朴ながらもフィレンツェの空を守っているようである。

しかし，広場の光景を圧倒しているのは，ミケランジェロのダビデ像であった。

純カララ産の大理石で造られたダビデ像は，壮麗な姿をしている。その表情，光と影のおりなす風刺，調和のとれた腕や脚の筋肉の躍動，手や指の細部にまで見られる表現はすべて，真に賞賛に価いするものであり，私たちの心をとらえる。

有名な彫刻家であったミケランジェロはその腕の秘訣を問われて，自分は石を彫っているのではないと語ったと伝えられている。彼は，自分の石を細工する方法はごく簡単で自然なものだと言った。大理石のかたまり１つ１つに像がかくされており，彼はただその石に捕われている像を解き放つために，いらない部分を取り除いていくだけでよいのだというのである。

この石から解き放たれて光り輝くダビデ像を眺めながら，私は７年前のことを思い出していた。私もやはり石に捕われた像であった。

末日聖徒イエス・キリスト教会を知る前の私には深い悩みがあった。私は，神と人と宇宙について抱いていた疑問の答えが得られないでいた。このため私にはすべてが憂うつで絶望的に映り，両親の心配の種となっていた。私は神の存在を疑うようになっていた。もし神がいるなら，人に答えを与えないままで放ってはおかないだろうと，真剣になって考えていたのである。

人間の起源はどうなのか。

この世の生涯の目的は何であろうか。

人の運命とは。

この世にいる間，人はどのように生きたらよいのか。

これらの質問の答えを私に教えようとした人は多くいたが私には満足できないものばかりであった。私は途方にくれて

われし像

ポール・ジェームス・トスケイノー

しまった。

しかしたとえ確かな答えは得られなくても，清い生活をしなければならないことだけは感じていた。私は両親から正しい生活をし正直であるようにと教えられていたので，その理由はわからなくても，両親の教えに従おうと思った。

しかしこれは私にはむずかしいことだった。年を経るにつれて私は誘惑を受け，悪魔は私の決意をにぶらせにかかった。良くなろうという意志を持ちながらも，私には正しい生活を守り通すだけの強さがなかった。誘惑に陥いったことが幾度となくあった。当時の私は，絶えず聖霊の導きを受けていなければ，決して正しい生活をすることはできないということを知らなかった。

だんだん望みを失い，いっこうに答えを見い出すことができないため，正しい生活をしようという気もほとんどなくなっていたようである。どうにもならないところまできていた。私は自分の弱さと無知にしばられた囚人であった。あの石に捕われている像同様であった。

私が教会を知ったのはそんな人生の危機に面している時であった。

友人のブレインが私に宣教師と会ってみないかと言った日のことを，今でもはっきりとおぼえている。さわやかなカリフォルニアの午後，学校が終って帰る途中，ちょうど私の家の曲り角まで来ると彼は出し抜けにこう言った。「モルモン教会について聞いたことあるかい。」

彼の思いがけない言葉に私はびっくりしてしまった。彼が末日聖徒イエス・キリスト教会に行っていたことは知っていた。彼がいつも学校へ持って行くノートの表紙に，教会の名前が書いてあるのを見たことがあったからである。でもこの時初めて，末日聖徒イエス・キリスト教会とモルモン教会が同じであることを知った。私は彼に，近所にモルモンだという人が住んでいたことがあったが，何年も前に引越してしまったと話した。

「もっと知りたいと思うかい。」彼は笑いながら私に言った。

「ぼくはもう宗教を持っているから，変えないつもりだよ。」私はすぐにそう答えた。私は，自分が答えを求めながらもその成果を得られないことを彼には言わなかった。正しい生活をしていないことも知らせようとはしなかった。

ブレインの顔からほほえみが消え，２人はちょっとの間黙って歩いた。

やがて彼はこう言った。「君の宗教を変えようというんじゃないんだ。教会について知りたくないか聞いただけなんだよ。」私にモルモン教会について教えなければならないと考えているブレインの気持がよくわかった。

私は高校２年生の時にブレインを知って以来，ずっと彼を尊敬し，崇拝してきた。彼はクラスのだれとも違っていた。どうしてそんなに違うのか私にははっきりわからなかった。おそらく，彼が私の望んでいる生活をしていると知っていたからだと思う。また彼の中にキリストへの信仰から生じる自信を見い出したからでもあると思う。事情がどうであれ，私はブレインが好きだったし，彼の気持を傷つけたくはなかった。そこで私は，宣教師との家庭集会に出ることにした。どんな結果になるというのであろうか。私は絶対に変えないと言っていたのである。その時まで，私は知らないうちに自分で自分を石に捕われた像にしていたようである。

とうとう宣教師との集会の日がやって来た。ブレインの家の質素な居間で，私は自分よりわずか１，２歳年上の宣教師とテーブル越しに向かい合った。今でもその２人の名前を，ベインズ長老，アーチル長老とはっきりおぼえている。

ベインズ長老はブレインに開会のお祈りを頼み家庭集会は始まった。私は宣教師と議論をたたかわし，私の教会でだれも答えられなかった質問をしてみたいと思っていた。しかし長老たちは，生ける予言者の必要なことを非常にはっきりと主張した。私は，現代の予言者については話したくなかった。三位一体について話したいと思っていたのである。しかし私たちはジョセフ・スミスについて話した。

宣教師たちはキリストの伝道の目的やパレスチナでのキリストの教会の組織，背教の歴史，奇しき福音の回復，神権，そして若き末日の聖見者による教会について説明を続けていった。この説明に加えて２人は，ジョセフ・スミスの召しが神からのものであり，回復された教会が真実であると証した。

感ずるところはあったが，私は認めなかった。卒直に言って，その日の私は良い求道者ではなかった。ずい分と宣教師

を困まらせたものだった。絶えずレッスンからそれて関係のない質問をしていた。私は宣教師たちに議論をふっかけ，彼らのもつ聖典の知識に挑戦してみた。しかしすぐに私の負けであった。最初の集会が終った時，宣教師は私にバプテスマの望みはないと思ったに違いない。

しかし，私の心のうちに何かが起こっていた。宣教師は自信にあふれ，その答えは簡潔であった。そして彼らの言葉が真実であることがあまりにも歴然としているため，私は反抗する気力を失ってしまった。私は聞かされたことを信じながらも，しばらくの間それを気づかれまいとしていた。自尊心が強すぎたのである。

でも私はそれほど愚かではなかったので，話を聞いて真理を悟った。

その日家に帰ると，私は他の教会に入ることについて両親に相談した。両親はその時あまり良い感じを持たなかった。ただの気まぐれぐらいに思っていた。

それから２年間，私は定期的にモルモン教会の集会に出席し，福音を勉強した。そうしながら，両親から教会に入る許可を得られる日に備えていった。

それは1963年の３月だった。私のバプテスマ許可証を手にひらひらさせながら，ブレインの家へ走って行った時のことをぼんやりとおぼえている。あまりのうれしさに，２人とも大声でわめきながら部屋を走りまわったものだった。これからのことを考えて夢中になっていた。

1963年３月15日，私はバプテスマの水をくぐり，喜んでキリストの御名を受けることを神に誓約した。また同様に，苦難を軽くするために人を助け，慰めがいる者を慰め，悲しむ者を思いやって共に悲しみ，いついかなる時でも，どのような所に居ても，どんなことについても，神の証し人になることを誓った。もし死に至るまでもこれらのことに忠実であれば，私は神に贖われ第一の復活にあずかる者の数に入って永遠の生命を得るという約束を受けることを知っている。（モーサヤ18：８－９参照）

翌日は日曜日で，私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に確認され，「聖霊を受けよ」と命じられた。

儀式を受けると同時に，弱さと無知から解放されるための過程が始まった。やがて私の疑問は完全に答えられ，聖霊の導きを受けて正しい生活を送ることができるであろうと思った。

私はもはや石に捕われた像のままではなかった。

もちろん，罪と無知から完全に解き放たれるまでには多くの時と，この世の生涯を要すると思われる。しかし，私は完全なる自由をこの身に受ける日のことを心待ちにできるのである。また日の栄の世界の下に在る一切の[1] 悪影響から解放され，神の栄光とみ力を一身に受ける[2] 日の来ることを心待ちにしている。

７年を経て教会の宣教師としてイタリアへ赴き，日に輝く広場に立った私の胸は，改宗当時の思い出にあふれていた。ダビデの像を見ていると，ミケランジェロの言ったあの言葉が再び胸に浮かんでくる。大理石のかたまり１つ１つに像がかくされている。私たちについても同じことが言えるのではないか。私たちの内部には，それぞれ神の「刻まれていない像」[3] が隠されているのである。

私たちはただその身を造り主と僕である予言者たちの手に委ねれば良いのである。そうすれば，私たちにはいらない所を取り除き，内に秘めた神を信じる心を見い出す方法を示されるのである。

大家のミケランジェロでさえ，自分の手になる作品に，のみを当てる際には注意深くやったように，私たちの造り主キリストは，私たちが石に捕われた像を解き放つ努力をする時に聖霊の力によって導かれるのである。主のみ言葉に耳を傾けるならば，私たちには確かにできる。

そしてこの世につける取るに足らないものをきれいに取り除いた時には，栄光に満ちた光を放って自由な自分たちが存在するであろう。もはや誤まりや無知，死に捕われることなくカララの大理石のように純白で，この世の悪をすべて取り去られるのである。

出来上ったものは私たちだけのものではない。すなわち，主のみ声に心を留めて初めて，刻まれた像は傑作になるからである。

すべての人が誓約に恥じないふるまいをし，つねに聖霊の慰めと導きを受けられるよう，またそれによって石に捕われた像を解き放つことができるよう，私は祈りたい。

1．教会歴史第１巻英文Ｐ．269（教義と聖約78：14も参照）
2．予言者ジョセフ・スミスの教え，英文Ｐ．51
3．トルーマン・Ｇ・マドセン，永遠の人，ユタ州ソルトレーク市，デゼレト出版社 1966年，Ｐ．17

※ ポール・ジェームス・トスケイノーは，1963年３月15日教会の会員となった。ニューヨーク州ブルックリン生まれの彼は，イタリアに派遣された最初の宣教師の１人で，イタリアでは宣教師新聞を編集していた。1970年５月に，ブリガム・ヤング大学の文学士号を受けている。

福千年

十二使徒評議員会補助
アルビン・R・ダイヤー長老

「Millennium（福千年）」という言葉は，ラテン語の「mille」すなわち千と，「annus」すなわち年に語源をもち，1,000年間を現わす。

聖典中で「福千年」と述べられている期間について，人々の見解を簡単に描写してみることは興味深い。

福千年を信ずる人々

キリストの地上降臨後，救い主は再び戻って来られ，一千年間統治されるという見解をもっていた人々がいた。これらの人は一千年至福説信奉者と呼ばれた。一千年至福説として知られているこのような考えは，初期のキリスト教会では一般的であり，多くの擁護者がいた。そのような信仰は詩篇にもとづくものである。「あなたの目の前には千年も過ぎ去ればきのうのごとく，夜の間のひと時のようです。」（詩篇90：4）この詩では人の一千年が神のわずか一日と対比されている。モーセの語った6日の創造は6,000年かかって創造されたことを示し，そのあとの安息日は1,000年の休息と幸福を意味していると考えられた。すなわち，福千年は人類にとって新しい創造の安息の期間となるはずであった。一千年至福説信奉者はヨハネの黙示録から「わたしはまた，新しい天と新しい地とを見た。……」（黙示21：1－6参照）というよく知られた一節をしばしば引用し，彼らの見解をそのヨハネの記した文で支えてきた。

初期のユダヤ人のキリスト教徒は，彼らが一国民として王なるキリストのもとで福千年の間世を治めるであろうと信じて，その考えに固執していた。また福千年をキリスト教の根本的な教義であると考えたモンタノス[2]の名にちなんで付けられたキリスト教一派と同様に，エビオン派[3]やナザレ派[4]，コリント人もすべて福千年論を唱えていた。

その後福千年が信じられたり，信じられなかったりして何世紀かが過ぎた。しかしこの初期のキリスト教の時代以来，宗教改革によって人々は刺激されたにもかかわらず，この説は二度と大きな力をもたなかった。

不足している福千年の知識

ほとんどのキリスト教徒が受け入れている聖書には，この「安息の期間」のことが述べられているにもかかわらず，これらの聖句の誤った解釈，福千年の目的と必要性に関してのキリスト教界の教義上の知識のはなはだしい欠如には驚くべきものがある。そのテーマに関しての沈黙あるいは否認は，疑いもなくその知識の欠如不完全さによるものである。

宗教を信じない人々によって考えられている福千年がある。彼らは物質的な福千年，すなわちある種のユートピアを想像し，それは将来ありうると主張している。人類は，自然の力により，あらゆる病いや弱さを克服し，また生物の体系毎に進歩して私たち人類の最良の要素を絶えず増し加えることによりもたらされる，更新進歩に目を向けねばならないと彼らは教える。

これらの考えはたいがい福千年の真の概念を曲解したものである。福千年の真の意義や目的に関する知識は，初めに時代と境界を定めたもうた神からの啓示によってのみ人に与えられるのである。

古代および現代の予言者の語る福千年

地上の生活の境界と住家は，最初の人アダムがそこに住む以前から定められていた。福千年は人類が地上にある間の必要欠くべからざる期間である。それは人々にとって休息と平和の時であり，自然や獣や人間のあらゆる敵意が消え，悲しみと歎きが人々の間からなくなる時であるとよく言われる。しかし，これらの状態はその期間の特徴であって，特にその目的を述べているのではないということを知らねばならない。

この世の最後のほぼ1,000年間には，父なる神の知恵により，全人類の間で神の御業が頂点に達するのが見られるであろう。神から啓示を受けた予言者の言葉によって，私たちは実際にキリストが福千年の統治をされている間，この世の生活を終え，復活して永遠の生活に入ってから，すべての人々がそこで彼らのつとめが果たせるよう，多くのみ業がなされるということを理解するのである。

この意味で「安息」は福千年の本来の目的ではない。私たちの安息はむしろ，労苦と争いから解き放たれる安息である。なぜならば，なすべき主のみ業は興味あるすばらしいものとなり，また理想的な状態のもとに行なわれるからである。だれも聖典をもとにして福千年を心配事や義務のない，喜びにあふれて目的なしに過ぎ去る時代として描き出すことはできないだろう。調整と審判と備えにとって大切な時期であるので，そのようなことは前もって定められた計画には入っていないのである。

福千年統治のために来られるキリスト

神の御子イエス・キリストが，全人類のために地上で生命と救いの計画を管理したもうということを覚えておかねばならない。イエス・キリストは，生涯を通していろいろな時と所で人々に委任された神権の鍵と権威，権能を持っておられる。このように，この世の業が終わるまで，主は明らかに大きな関心を寄せ，身近にいてくださるのである。その後，イエス・キリストは義人のためにさらに偉大な主権を持たれるであろう。

予言され，また確かに必要であるように，イエス・キリストは福千年が近づくとたびたび地上を訪問され，福千年に通じるみ業を行なわれるために影響と力とを絶えず与えられるであろう。

アダム・オンダイ・アーマンにおける古代の神権者の大会議

1830年8月，ペンシルベニヤ州ハーモニーにおいて，ジョセフ・スミスに与えられた啓示の中で，主は「時来れば」各時代に仕えていた古代の多くの予言者と地上で会うと述べておられる。（教義と聖約27：5参照）アダムが死ぬ3年前に義人の孫を呼び集めて彼らに最後の祝福を授けたのは，アダム・オンダイ・アーマンの谷であった。予言者ダニエルの見た示現によると，「日の老いたる者」が座するのは，この同じアダム・オンダイ・アーマンの谷である。（ダニエル7：9参照）神権時代の鍵を持った人々が，そこでミカエルの前に立ち，救いの鍵を所有している人類の族長の君に自らの職を渡すであろう。それは審判と備えの日となるであろう。

キリストは1,000年間地上に住まれ，自ら統治されるのでアダムに渡される鍵は，アダムからキリストに渡されるのである。このように，神権の権能はすべて御子に戻されるのである。今生きておる，神の偉大な末日のみ業を行なっている多くの正しい指導者が招かれる，アダム・オンダイ・アーマンの大会議で，主は正式にこの地球の統治権を引き継がれるのである。

統治権の引き渡し

世の人々にとって最も大切な事柄は，統治権が強奪者であり，詐欺師であるルシフェルから正義の王イエス・キリストに引渡されることである。そこに集まる神権者は，この事柄を支持し，福千年に先立って備えが行なわれるように，彼らは主から直接に指示を受け，権能を委任されるのである。世の人々は，この会合の開かれる時がいつであるかを知らない。教会の会員も大部分知らないであろう。公式に召された人のみが出席するのである。このようにキリストは再降臨に先立って来られ，それによって「盗人が夜くるように」来られるという聖句が成就されるのである。（Ⅰテサロニケ5：2）[6]

実際にキリストが福千年の統治をするに先立って成就されるべき大切な事柄は，予言と啓示によって示されている。こ

れらの事柄は，確かに神の御子イエス・キリストが管理されるアダム・オンダイ・アーマンの大会議で十分考慮されるであろう。そして次の事柄についてその時に指示が与えられるであろう。

1．エフライムとマナセの子孫，および永遠の誓約を受け入れてイスラエルの家に数えられる多くの異邦人が共に参加する，新エルサレムの建設。（Ⅲニーファイ21：22，23参照）

2．この時に本格的に行なわれる，ヤコブの家の残りの子孫（レーマン人）のための事業。（Ⅲニーファイ21：23，26）

3．失われた支族が立ち帰り，新エルサレムに加わるための備え。（Ⅲニーファイ20；21：26）

主は突然神殿に来られる

主が再降臨前にもう一度来られるのは，現在ミズーリ州ジャクソン郡として知られている地域のシオンの中心地に建てられる，新エルサレムの神殿である。（Ⅲニーファイ21：25参照）確かにこの時，出席するよう命じられた人々を前にして，主は福千年の地上を平和に統治し，すべての人に愛を与えるために，いっそうの備えをなさるのである。これを行なうために，主はこの時「審判のため咀いをもて……誠に神を忘るるすべての国民と，……神を敬わざるすべての者の上に」来られるであろう。（教義と聖約133：2）予言者マラキがこの特別な主の訪れについて述べているように，主は「金をふきわける者の火のようであり，布さらしの灰汁のようである」。（マラキ3：2）

キリストの福千年統治のための準備の時代には，シオンの聖徒はかつてないほどに，試されるであろう。そして彼らは主の再臨の時に主に会うため上げられる価値のあることが証明されるのである。

悪人は滅びる

いかに滅びるか：福千年前の期間に，不正で邪悪な者は自ら滅びるであろう。そして彼自身の不従順と，人々が聖霊の力に抗するのを許さない正義の律法がおもな原因となって，地上の文明が倒壊し，衰退していくのである。

はっきりと現われる区別：予言やたとえ話，直接の啓示で明らかなように，地上の人々による神のみ業が最高に達するこの時期には，正しい者と不正な者，義人と不義なる者，善人と悪人というように，すべてのものがはっきり区別される。ほとんどの者はどちらかに属し，最後の数年間にはさらに著しい相異が現われ，その結果ついに，ルシフェルの率いる地獄の軍勢と天使長ミカエルの率いる義の軍勢との間に戦いが起こるのである。（教義と聖約88：111—115参照）

縛られるルシフェル：悪人が滅び，地上に残った人々は正義のうちに住み，サタンは彼らに対して何の力も持たなくなる。このように，サタンすなわちルシフェルは縛られるのである。サタンの力は制限を受け，人はもはやサタンにだまされ，惑わされることはない。サタンは縛られ，創造の安息日である第七の千年間に必要なみ業がすすめられる。

この世の二大首都

キリストの指示のもとに行なわれる，この世の統治に備えて，義人すなわち悪人が滅びた後地上に残る人々は，一つの光栄ある王国すなわち国家を形成する。この期間に成し遂げられるべき偉大な業を進める人々の中で，さらに多くの義人が世界の国々から二箇所の地に集められるのである。その一つはシオンの娘と言われているエルサレムであり，ユダ族の子孫と，イスラエルの他の支族の子孫からなる必要とされる多くの者がそこに集まる。またもう一つはシオンと言われている新エルサレムの町であり，イスラエルの長子の権をもつエフライム族が率いる他のすべてのイスラエルの支族が，呼掛けに応じて最初に集合する所である。地が分かれる前の時代のように，「島々」すなわち大陸が一つになり[7]，現在合衆国の地理的中心になっている地点に立てられる新エルサレムと旧エルサレムとの間の距離は，非常に近くなるのである。

神の王国

神の王国とはキリストの教会そのものであり，聖なる神権と，神権の権能が行使される鍵とが回復されて以来，この末日に地上に建てられている。また，アダムに神権が授けられて以来，神の王国はいろいろの時代に地上に建てられた。これらの時代は神権時代と呼ばれている。これらの内で最後にして最大の「時満ちたる神権時代」（エペソ 1：10；教義と聖約112：30）は今である。従って，イエス・キリストの教会すなわち神の王国が地上にあるのである。

天の王国

主のみ名によって祈る人々に，主は次のような模範的な祈りを教えられた。「御国がきますように。みこころが天に行われるとおり，地にも行われますように。」（マタイ6：10）

また，地上に天の王国が建てられることに関して，次のように述べられている。

…教会を含めてよろずの国が集って構成する天の王国は，自らの生命をぎせいにして贖ったこの地球を親しく支配統治するために彼の天軍を従えて勝利に輝く主が来りたもう時，権能と大いなる栄光とによって建てられるにちがいない。

すでに知っている通り，天の王国は教会だけではなくほかのものも集ってこれを構成する。人類の中で名誉ある正しい者たちは，キリストが管理したもう完全な政治組織の下で，その市民たる身分を保護せられまたその特権をも許されるにちがいない。そして，教会の会員であってもなくても，これが彼らに与えられる分け前である[8]。

福音を心から受け入れて福千年の間教会に加入する人々は自分自身の救いのためと，キリストの福千年の統治以前の時代に死んで身代りの許しがあるまで獄で待っている先祖のために，聖なる神権を所有し，行使する権利を与えられるのである。

キリストの再降臨

末日聖徒イエス・キリスト教会の信仰箇条第10条には「キリストは御自ら地上に王となりて治めたまい」という教会員の信条が述べられている。その霊感された言葉は，養子として御父から与えられた子供たちと共に地球を統治される神の御子の輝かしい再降臨に関して述べられている。予言者ジョセフ・スミスは，主に帰せられる国の主権に関して，このように述べている。

世の初めからエホバのご計画であり，またエホバの目的とされるのは，御自身の時代に世の諸事を統制され，宇宙の頭として立たれ，自らの手に国の権力を握られることである。それが行なわれる時には，審判が正義のうちに執行され，無秩序と混乱が無くなり，「彼らは（国々は）もはや戦いのことを学ばない」であろう。（イザヤ２：４参照）すべてこの混乱が起こったのは，この偉大な統治の原則がないためである。すなわち「歩む人が，その歩みを自分で決めることのできない」（ヨエル10：23）ためである。このことを私たちはよく知っている[9]。

族長と予言者は主と共に来る

エノクと聖なるエノクの町の人々，族長，予言者，使徒はこの再降臨の主権と栄光のうちに主と共に来るであろう。時の絶頂の神権時代の十二使徒と，主が来られる時の主のみ前での彼らの立場について，主は次のように言っておられる。「わたしの国で食卓について飲み食いをさせ，また位に座してイスラエルの十二の部族をさばかせるであろう。」（ルカ22：30）[10] 人々に導きと恵みを与えるために主に召されたニーファイ人の十二弟子にも，同様な福千年での務が与えられた。予言者ジョセフ・スミスは，主が来られる時，「人の子の御顔を拝すべし」（教義と聖約130：15）と約束された。また予言者は「われらはその御姿を見て，救い主はわれらと同じく人間なるを知らん」（教義と聖約130：１）と述べている。予言者はまた別な時に，主はジョセフ自身，モロナイ，エライヤス，エライジャおよび他の予言者たちと共に「葡萄の蔓の実より造りたるものをこの世に在りて」飲むであろうと約束されている。（教義と聖約27：５—12参照）

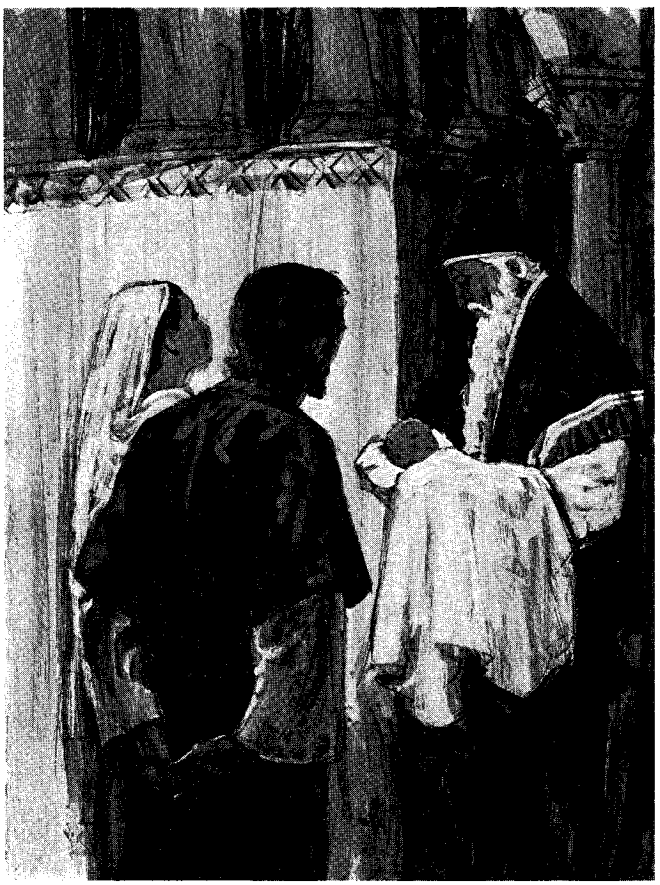
したがって私たちは，聖徒と呼ばれるにふさわしいすべての義人すなわち，神を知ってイエス・キリストの福音に従いすでに死んだか身を変えられた人々，あるいは復活した人々，霊界で復活を待っている人々は，主が来られる時に地上に生きている人々と共に，「瞬く間に」（教義と聖約 101：31）復活してよみがえり，雲の中で主と会うために上げられると考えることができるのである。

主の再降臨の偉大さと驚くべき力と主権については，多くの予言者が詳細に述べてきた。彼らは世の初めから正しい人々が心の中で予期していたこの栄光ある出来事を，啓示と示現と主ご自身からの顕現によって，知ったのである。

（注）

1．千を意味するギリシャ語のchilioiに語源を有する。
2．２世紀に起こったキリスト教の分派モンタノス主義の創説者で，福千年を信じた人。モンタノスは，彼がキリストにより約束された慰め主であると唱えた。
3．救い主としてのイエスを信じたが，処女誕生を信じない２世紀のユダヤ人クリスチャンの一派。
4．イエス・キリストを神として受け入れた４世紀のユダヤ的キリスト教徒の一団。
5．アルビン　R．ダイヤー著，「主は語りたもう」P．183—185（英文）
6．マタイ24：43参照
7．教義と聖約133：22—34。創世10：25参照
8．ジェームズ　E．タルメージ著「信仰箇条の研究」P．483——484
9．教会歴史記録，第５巻 P．63（英文）
10．マタイ19：28参照

大きなすばらしい約束



マーガリー・S・キャノン

「この赤ちゃんなのだろうか」

おじいさんのシメオンは，しんでんに入ってきたばかりの男の人と女の人をみながら心の中でそう思いました。男の人は鳥かごを手にしていました。その中には2羽のひなばとがいました。これらはいけにえとしてささげられるものにちがいないとシメオンは思いました。それはりっぽうできめられていたことでした。女の人はとても若い人でした。うでには生まれて6週間ばかりの赤ちゃんをだいていました。それぐらいの年の赤ちゃんはみんなしんでんにつれてこられました。これもりっぽうできめられていることでした。

シメオンはながいまっ白のあごひげをひっぱりました。なにかこの赤ちゃんにはふつうの赤ちゃんとちがうところがある……。

「この赤ちゃんだろうか」と思わずふしぎに思っているきもちを声にだしてしまいました。

おじいさんのシメオンのきもちはだんだんとおちつかなくなってきました。おじいさんはながいながいあいだ，いつくるかいつくるかと待っていました。おそらくおじいさんが待っていた日は今日なのでしょう。

エルサレムの多くの人たちは，シメオンが死ぬまでに救い主をみたいと思っていたことをよく知っていました，シメオンはほかのどんなことよりもこのことをお祈りして，おねがいしていました。そしてシメオンは神さまがこのお祈りにこたえてくださることを，びっくりするほどつよくかくしんしていました。それはシメオンに知らされたやくそくのようでした。

その二人のところへいきたいという強いきもちにおされて，シメオンはかれらの方に向かいました。この強いきもちは今日，しんでんにゆくようにかりたてたあのきもちと同じものでした。

シメオンの心はドキドキしてきました。

「赤ちゃんを見せていただけないでしようか」と，かれはおねがいしました。その若い女の人はにっこり笑ってうなずきました。そして，赤ちゃんをシメオンの方にさしだしました。

シメオンは赤ちゃんの顔を息もとまるほどにジッとながめました。すると心の中に大きなよろこびがふくれあがってきました。約束が本当になったのです。

シメオンは，うでの中に赤ちゃんをうやうやしくだきました。かんしゃの涙がほおを流れてきました。

「神さま，ありがとうございます。もう心安らかに死ねます。私はこの目で約束された救い主であるあなたのみ子を見ました。かれは世の光であり，み民イスラエルの栄光であります」（ルカ伝2:29—32）とシメオンは天をみながらお祈りしていいました。

マリアはじぶんの子供についていわれたことばをふしぎに思いました。マリヤはしばしのあいだ，じぶんの息子が生れるまえに，神さまのみ使いから「救い主」といういみのイエスという名前をつけられていたことを忘れていました。

アマゾンでのクリスマス・イブ

ヘイゼル・スワンゼン

10歳になるジョアンナ・ハルガは長くあんだブロンドのかみの毛を後へふりかざしながら，こみあげてくる涙をいっしょうけんめいおさえようとしていました。彼女はお母さんと妹のジュリアンナを手伝って，クリスマス・イブに自分たちといっしょに過ごすことになっているお客さまを迎えるじゅんびをしていました。

ジョアンナはこんなに楽しいことを，そのままにしてロバのセリニを連れて八キロもあるジャングルの道を通って，クリスマスのお祝いにルバードスおばさんをむかえに行くのは気のすすまないことでした。つごうの悪いことには今夜こられるお客さまの中にゴムえんのはじの方に住んでいる人がいないのです。もし住んでいる人がいれば，おばさんを連れてきてもらえるのですけれど。

アマゾンのジャングルの中にたてられた彼女たちのレンガづくりの家の中は，お料理に使われるこうりょうのにおいでいっぱいでした。お母さんは，彼女特製のクスカズやすばらしくよく味つけされたイワシとエビ入りのむしパイをつくりあげていました。サーベリー・ソースで味つけされた6羽のにわとりは，火が入りよく熱っせられた大きなほら穴のようなレンガづくりのオーブンの中に，仕あげのために入れられるのを待つばかりになっていました。

「さあ，ジョアンナ，もうふくれっつらをするのはおよしなさい。」とお母さんはけさ，みがいたばかりの木の床をいそがしくゆききしながら，やさしく注意しました。「クリスマスの本当の心は愛することと与えることにあるのよ。あなたもこんなクリスマス・イブに，ルバードスおばさんを彼女の小屋にひとりぼっちにしておきたくはないでしょう。」

「でもセリンが，とちゅうでひと休みしなくても三時間はかかるわ，それに，道にへびが出てくると，セリンはいつもこわがったりするから，遅れてしまって，楽しいことはみんな終ってしまうもの。」

ハルガー夫人は首をふりながらいいました。「まあ，まあ，もうたくさんだわ。ゴムをとり歩く人の子供であることは，らくではないわね。でも，お父さんだってつらいけど，私たちをやしなうために，ゴムを木から集める仕事をなさっているのよ。みんな，どんなことにもかんしゃすべきだわ，たとえそれがしたくない仕事であっても。ましてや，人をよろこばせる仕事ならもっと，かんしゃしなくては！」

そういわれても，ジョアンナはあまり，かんしゃする気持になれませんでした。彼女はお皿に入れてあるおかしをとっ

て，ニューヨークのおじさんから送られた，風変りなプラスチック製のクリスマス・ツリーのまえに，すわっている妹のジュリアンナのところに行きたいと思っていました。

ジュリアンナはフーガー家の最高の宝物である，美しいかざりものの「馬小屋の風景」をかざりつけていました。それはフーガー家に百年以上もうけつがれてきたものでした。また，それは戦争が終ったあとに，フーガー家がオランダから持ってきた，たったひとつのものでした。ジャングルの中で生まれ育った二人の女の子にとって，この「かざりもの」は両親がふるさとのオランダの話をしてくださるとき，いつもその話を生き生きとよくわからせてくれるものでした。雪やこおった河の上ですべるスケートなどのクリスマス風景を想像してみてください。このジャングルの中ではとつぜん降ってくる雨の他は一年中かわらぬお天気でした。

・　・　・

ジョアンナは口笛をふき，セリンにあいずをしました。セリンはゴムの木がりようがわに立ちならぶまがりくねった細い道を，朱ぬりの木車をじょうずに引っぱってゆきました。ジョアンナはこのお使いがだんだんと楽しくなりはじめました。お母さんのいうとおりでした。ルバードスおばさんは，大家族であった子供たちがみんな海岸沿いの町にうつってしまったので，クリスマスを一人で過さなければならず，それはとても気のどくなことでした。ほんとうに，ジョアンナはこの道をゆくのがいやでなくなりました。

きれいな色をした鳥が頭ごしにとんでゆきました。頭の上の方では，木のささやくような音がし，いろいろなジャングルの動物たちのおしゃべりが聞えてきました。

二時間もたったころ，ジョアンナはルバードスおばさんが，家といっている一部屋だけのわらぶき小屋につきました。年とった色の浅黒い女の人が，ある骨の病気のためにほとんど身体を二つに折ったように腰をまげて，戸口のところに立っていました。けれども彼女のいきいきとした茶色の目には，あたたかい感謝の気持があらわれていました。ジョアンナはさっそく，荷車の後に色とりどりの毛布をしいて，すわりごこちのよい席をおばさんのために作りました。

「セリン，おいで！早く！　さあ，おうちに帰りましょう。」とさけぶジョアンナの声は幸わせそうでした。なにごともなければ，うすぐらくならないうちに家に帰れることでしょう。

十五分もたったころ，とつぜん，あのどしゃ降りの冬の雨がふり始めました。「あら，まあ，ルバードスおばさん，毛布をかぶってくださいね。まだまだずいぶんかかりますから。」とジョアンナがいいました。

「たぶん，すぐやむでしょう」とルバードスおばさんはなぐさめるようにいいました。そうであればいいけどと思いながら，先をいそぎましたが，雨はゆくほどにひどくなるばかりのようでした。でも，セリンもジョアンナも雨にはなれていました。このぶんだと少し遅れるていどですむことでしょう。

大きな鳥が木から，とつぜん飛びおりてくるまではすべて順調でした。セリンはおどろいて，うしろ足でぼう立ちになりました。荷車は古くなって，いたんでいるところから，はずれてしまいました。そしてぬれた草の葉のためにすべりやすくなっていましたので，荷車はひっくり返ってしまいました。車輪の一つがはずれて，草むらの中へころがっ

てゆきました。ルバードスおばさんとジョアンナは気がつくと毛布と葉っぱにくるまって放り出されていました。

ジョアンナはもつれを解いて立とうとしたとき，「あっ，私の足！私の足首が！」とひめいをあげました。

どろんこの道のうえでまっすぐに身を起そうとしていたルバードスおばさんは首をふりながら，「私の家まであなたをつれてゆかなくてはね。足首をしばらなくちゃ，おいで！私によりかかりなさい。」といいました。

ジョアンナはもう一度立とうとしてみたとき，顔をしかめました。むだでした。ルバードスおばさんの小屋にもどらねばならないでしょう。「クリスマス・イブのお祝いに出られないわ。」と悲しそうにジョアンナは泣きました。涙が雨のようにほおを流れおちました。

「あら，あなたのおうちでクリスマス・イブなら，そまつだけど私のうちでもクリスマス・イブよ。それに，人のすることはうちでもしたほうがいいわ。」

まもなく，小屋に二人はたどりつきました。セリンは，あたかも自分もすばらしいお祝いに出られなくて不幸だといわんばかりに二人のあとから，悲しみにうちしずんだようについてきました。

「いま，あたたかいココアをつくってきますから，ベットで休んでいなさいね。それから，ローソクをつけて，足首をしばってあげましょう。そうするとあまり痛くならなくてよ。」

ローソクの火がゆらゆらとゆらぎました。ジョアンナはココアをすすっていました。部屋においてある，つつましやかな家具をみわたしていたとき，ジョアンナは古びた松の木製のタンスの上にかざってあるあの『馬小屋の風景』のかざりものをみつけました。

「まあ，おばさまのうちにも「馬小屋の風景」のかざりものがあるのね。」ジョアンナはほうたいをやさしくまいてもらっているとき，顔をしかめないように努力しながらいいました。

「ええ，クリスマスごとにタンスの上におくことにしているのよ……。私の夫が彫刻し，息子たちが色をぬったの。もうぬりなおさなくてはいけないわね。あるものすべてそうねきれいな色が消えてしまっているわね。でもクリスマス・イブに私の家に子供がいるなんて，うれしいことだわ。ほんとうに！神さまからのおめぐみのようね。」

がっかりはしていましたが，ジョアンナはこのやさしい婦人に心を動かされずにはいられませんでした。「馬小屋の風景」のかざりものを，ともによろこびあう人がだれもいない一人ぼっちのクリスマス・イブなんて，きっとひじょうにかなしいことでしょう。お母さんがルバードスおばさんを招待して，イブとクリスマスの朝をいっしょにすごしましょうとのぞんだのはとうぜんのことでした。ジョアンナは自分のそむく心をわるいと思いましたが，いまや二人とも楽しい家でのお祝いに出られなくなったことを思うと，涙をこらえることができませんでした。

「まあ，足でも痛むの？」とルバードスおばさんがききました。

ジョアンナはうなずきました。涙のわけを足首の痛みのせいにした方がよかったからです。

とつぜん，ひげのはえた鼻がドアをおしあけました。「セリン！入ってきちゃだめよ」とジョアンナはさけびました。ルバードスおばさんはセリンのたずなに手をのばしました。荒い鼻息をしながら，セリンはくるりとまわりました。そして，雨の中をしぶきをあげながら走ってゆくのがまもなくして，聞えてきました。

ルバードスおばさんはジョアンナのあんだかみの毛を手にしながらいいました。「ジャングルにきたオランダの小さいおじょうさん，こわがらなくてもいいのよ。このような嵐には私はなんどもあってきたわ。そして，いつもすぎてゆき，そのあとには太陽が顔をだすのよ。聖書からクリスマスのお話をよんであげましょうか。」彼女はよくつかわれた聖書を手に，すぐもどってきました。そして，お話の書いてあるところをすぐにさがしだして，読みはじめました。

「イエスがヘロデ王の代に……」（マタイ伝２：１）

彼女は読みつづけました。そして読んでいるうちに，色あせた「かざりもの」になにかふしぎなことがおこってゆくようでした。イエスのまわりにいる人たちに向って安心しきって手をさしあげている幼な子のイエスの彫刻は笑っているように見えました。イエスがお生れになったところは，この小屋と同じようにみすぼらしいものでした。

とつぜん，嵐の音よりも大きなさけび声があがりました。

「パパだわ！」とジョアンナはさけび，立ちあがろうとしましたが，足がいたくてやはりすわらねばなりませんでした。ほんとうに小馬のマカドに乗ったお父さんでした。ジュリアンナはセリンにのっていました。セリンはもう二つの車輪をくっつけた荷車を引っぱっていました。お父さんはジョアンナとふざけながら，防水された布地でおおわれた荷車の中にルバードスおばさんのとなりにジョアンナをすわらせてくださいました。それはうれしいことでした。そして，もうこんどはお父さんのサドルにセリンのたずなをしばってあるので，セリンがさっきおこしたようなことがおこるしんぱいはなくなりました。

ルバードスおばさんはまがったうでをのばして，また，ジョアンナのあんだかみの毛を軽くたたきました。おばさんは「ジョアンナ，ほんとうにあなたはいい子ね。もうすぐ，おうちに帰ってクリスマス・イブをお祝いできてよ。」といいました。ジョアンナはにっこり笑いました。ジョアンナはクリスマス・イブはもう，ルバードスおばさんの家でお祝いをすませてしまったことを心のうちで知っていました。

学ぶこと

ジョン・H・バンデンバーグ

私たちはどんな経験を通しても学ぶことができる。ウオルト・ホイットマン*の書いた詩の中に，散歩に出かけた少年の見たものが，みなその少年の一部となってしまったという話がある。私たちについてもそれと同じことが言える。見ること，聞くことなすことすべてが私たちの一部となるのである。私たちは意識的にでなければ偶然に毎日何かを学んでいる。

私たちには自由意志があり，学びたいことをある程度まで選ぶことができる。今日，非常に多くの若者が主にテレビから学んでいることが調査の結果明らかになっている。

テレビは子供たちの語彙をふやしてくれるといわれている。テレビが宣伝用化しているアメリカで，6歳から12歳までの子供たちを対象にテレビで覚えた言葉の調査が行なわれ，そのリストができあがった。そこには15のビールの商標と13のたばこの商標があげられ，ある商標の洗剤が全部のリストにのったのである。

注意深く番組を選ぶならば，テレビからも学ぶことはたくさんある。しかし子供や若者はあらゆるマスメディアを通じて行なわれる宣伝に十分注意を払わなくてはならない。もし，日々目や耳に大げさに訴えて宣伝している品物が必ずしも良いもので人気のあるものと思っているなら，彼らは失望してしまうことだろう。

確かに，福音に生きている立派な若者はそのような迷想にだまされることはないのである。

私たちは末日聖徒の若者が，教育や他の価値ある分野において物事を達成したことを読みあるいは聞くとき，なんと誇りに思うことだろうか。また多くの若者が神の栄光は英知（教義と聖約93：36）であると心から信じ，自分たちの持つ可能性をためそうとあらゆる努力をしているのを知って喜びを感じる。

私たちはいつもの神権プログラムや補助組織のプログラムの他に，末日聖徒の若者がどれだけ宗教講座や神学講座を利用しているかを知っても大きな満足を得るのである。私たちは，献身的な兄弟姉妹が霊感を受けて書いたテキストを用いてレッスンをしてくれる若者を愛し，同様に献身的な人々がいることに感謝するものである。私たちはすべての教会の若者がそのようなすばらしい学習の機会にあずかるようにと望んでいる。

教会の若者は，教会のいろいろな集会で話す責任を引き受けることにより自分の気持ちを表現するということを学ぶ機会に恵まれている。これは自信をつけ，出世するためのすばらしい訓練となる。自分の気持ちを表現できる人はできない人よりも常に有利な立場に立つものである。私たちは，進んで熱心に若者を鍛える手助けをしてくれるスピーチの指導者に感謝している。意志を伝えることを学ぶのは，私たちが受けることのできる最も報いあるレッスンの一つである。

会話は滅びた芸術と化したと言った人があるが，家族の一人一人が献身的な行ないをしている家族にとって，それはあてはまらない。たとえば，家族全員がその日に見聞きした最も興味ある話を持ちだす夕食時には楽しい会話が行なわれる。家族の兄弟姉妹が自由に言葉を交わしながら，互いの行ないに心から興味を示しているようすを耳にするのはなんとすばらしいことではないだろうか。

教会は家族が一緒になって学ぶ家庭の夕べというプログラムを提供している。このプログラムは，若者の熱心な協力と参加によって最も成功したプログラムとなっている。小さな弟や妹はそのプログラムに熱心な兄や姉の模範に従うものである。

私たちはまた，しばしばユースコンファレンスの証会で感激する。そしてそのような証がワード部の断食証会でも聞けるならどんなにすばらしいことかと考えずにはいられない。若者がそのような会の親しみやすい霊的な雰囲気の中で，大人たちの前に立って話すということはなんと貴重な経験ではな

いだろうか。

私たちはまた日々交際する人々からも学ぶ。私たちは教会の若者が，どのようにしたらより福音にそった生活をすることができるかを学べるような友人，努力しているときに励まし，勇気づけてくれるような友人を持っていると希望し，そう願うのである。だれとでも仲良くすることはすばらしいことであり，悪い方向へ行こうとしている人々を助けることは立派なことである。しかしながら，散歩に出て見たものすべてが自分の一部となった子供のことを忘れてはならない。私たちは確かに私たちの友人から学ぶのである。そしてもし私たちが生徒ではなく教師の立場に立つならば，私たちはこの上なく強く，賢く，よく準備のできた者となるのである。

主は私たちに最も善き書より智恵ある言葉を探し求め，研究と信仰とによって学問を求むよう（教義と聖約88：118参照）にと戒めておられる。私たちは，読書がこの上ない貴重な知識の源泉であり，私たちの読むものが私たちの一部となることを知って，賢明な選択をするよう自由意志を使わなくてはならない。

学ぶことはたくさんある。そして青年という時期は学ぶのに最上の時である。青年時代は将来成功し，幸福を得るための準備の時期であり，決断を下す時期である。伝道に出ようと決心している人にとって，それは準備の時期となる。日々の仕事に満足できる生活を望んでいる人にはそのために必要な技術を学ぶ時期となる。私たちは大学や職業学校に通っている若者のみならず，手に職をもってそれらに従事している若者をも同様に誇りに思っている。

青年時代はまた夢見る時期でもある。しかし学ぶことをせず，なすべきことをしないで夢を見ていてはならない。神殿結婚を夢見ているなら，今はそのような結婚を価値あるものにするための学ぶ時期となる。また今は，永遠の伴侶としてすばらしい人に選ばれるような男性，女性となるよう準備する時期でもある。いつかあなたがた自身の家庭を作りたいと願っているなら，今は小さな子供たちを導いていくうえで必要な人格や性格を形成する時期となる。

私たちは，今日の末日聖徒の若者に大きな信頼を寄せている。将来，あなたがたは教会の指導者となるのである。召しが来たとき，あなたがたの準備はできているものと私は信じている。

障害を取り除く

クリスマスの歌や物語には，み子を拝みに愛の贈り物を持ってやってきた羊飼い，王，博士たちの話が数多く織り込まれている。その多くはほとんどよく意味を考えなくとも歌いあるいは語ることのできるものであるが，あまりにもしばしばそうされすぎているように思われる。

しかしこの古い話の中に，今の分裂した時代にあって考えなければならないこと，善良な心と良き望みを持ったすべての人々が考えなければならないことが一つある。この地上に一人の幼子が生まれ，その幼子によって知識のない人々と全能ではないことを知っている賢明な人々とはひとつとなり，身分の差や障害は取り除かれてキリストの精神において同胞となったということである。

現在は，他のどんな贈り物や慰めよりもそのような精神をもたらしてくれる力を必要としている。自分の知識の限界を知り，この世の富のはかなさと権力のもろさを知っている人々にとって，また身分の差という障害物をのり越えてキリストの精神に一致しようとしている人々にとって，それはなお効力を持っているのである。

——マリオン・D・ハンクス——

ヨセフから大工仕事を学んだ人

七十人最高評議員会会長
S・デルウォース・ヤング

クリスマスの時に，愛する人々から受けとったおくりものを開けるまえ，ちょっとの間まじめに考えて見ようではないか。

私たちは大人である。私たちはだんだん大人になっていくという緊迫感を感じている。私たちは文字どうり，真に成長した大人であると感じている。これらのおくりものは世の救い主とちょっと関係がある。主が私たちのために死にたまわなかったのなら，私たちはこの日を祝わないであろう。おくりものもなく歌もなく，ろうそくや飾りつけられた木もあり得ないであろう。私たちは主についてあまり考えないのにおくりものには胸をわくわくさせる。

私たちはまたおくりものをくれた人々に対しておくりものをしていることに気がつく。私たちは果たしてうけたものと同じだけのものをおくっているだろうか。私たちは両親に対してそのようにしてはいないと思う。両親は私たちにいろいろなものをおくってくれるだろう。私たちはそう期待しているのである。両親は私たちを愛していないのだろうか。私たちが両親に対してできる小さなおくりものの1つはかれらに私たちの愛をあらわすことだと思う。両親は理解してくれるだろう。かれらは多くのおくりものを期待していない。どんな方法であれ愛と感謝のしるしに満足するだろう。

果たして主，イエス・キリストに対してそのようにしているだろうか。私のすべては主により与えられている。主は，私の両親のように小さなおくりもので満足なさるだろうか。私は若い時から主について考えている。主もかつては若かった。主は自分が神の息子であることを知っていたにちがいない。そうでなければなぜ主は神殿の中で教師たちに父の御業にたずさわるべきであると話したのだろう。(ルカ2：49) 父とはヨセフのことではなかった。ヨセフは一介の大工でありその上主はその時，このことをヨセフに対して語っていた。

私は主の若い頃はどのようだったのだろうかと思う。一つ，はっきりしていることは，主はこの世での両親に従順であったということである。主はヨセフから大工の仕事を学んだ。もしも主が永遠の模範をお示しになったのならば従順においても主はその模範をお示しになったのではないだろうか。主はヨセフやマリヤよりもはるかに知恵に優れていた。主はその優れた知識を誇りかれらを見下すこともできたのだ。

しかし，若きイエスは成長するまで，両親に従ったのだった。

主の生涯は私にどんな意味を持つのか。私は主の犠牲の意味を完全には理解していないが信じることができる。なぜそうなのか私はよくわからないが。主は天父に従順だったが，若い時にはヨセフに従順だった。そのような生涯は天父を喜ばせた。これこそ主に捧げるべき私のおくりものではないだろうか。

自分自身へのおくりもの

「あなたが知らなくてはならない，あなたの前を行く一人の老人がそこにいる。彼はあなたに似ていて，あなたのように話し，あなたのように歩く。彼はあなたの鼻でかぎ，あなたの目で見てあなたのあごを持つ。彼があなたを愛すも憎むも，尊敬するも軽べつするも，彼がおこるか和ぐか惨めになるか，幸福になるかすべてあなたにかかっている。なぜならあなたが彼を造るのだから。この老人はあなたの将来の姿である」これは最近リチャード・L・エバンズが語った話の一節である。

あなたは，自分自身へのおくりものである。あなたが今やっていることが明日のあなたを決める。

「人生は細い糸の上をちょっと歩くようなものだ。初めも終りも知らされていない。私たちが細い糸の上を歩くとき望みがあれば均衡が保てる。私たちが人生を思うときそれは短く見えるかも知れないが実は終りなきはてしないもの，私たちが持つすべてのものである。」（作者不詳）

人生は私たちの持っている唯一のものでありすべてである。しかし人生について思う時，人生は何んと多くのものを持っていることだろう。私たちがこの世を離れるとき，次の世にたずさえていかなくてはならないのは，良きにつけ悪しきにつけなした業と知恵のみである。もしも私たちがこのことを毎日心にとめることができたならおそらく私たちは更によくなろうともっと努力するだろう。私たちの多くは日々の喜怒哀楽にとらわれてこの地上にいる目的を忘れてしまっている。しかし人生だけが学ぶための唯一の道である。人生の最も重大な問題の一つは私たちが他の人々といかにやっていくかを学ぶことである。

その安直な方法は自分の主義を曲げることである。すなわち世の中は全くさまざまなのだからといって，すべて世間に妥協することである。しかしこれは正しい道ではない。

それではすべての人を満足させることはできないし，たとえ自分の主義を捨てても，それは人間関係という問題に何らの解答も与えないのである。主義を曲げることはただの妥協であり，自己を欺くことである。自分自身を欺く人はだれにも受け入れられず決して尊敬されない。

人々は時どき自分たちのではなく私たちの標準，すなわち私たちの信じていることで私たちを判断する。私たちが自分自身の主義を捨てる時，人々はがっかりし私たちに幻滅する。

私たちが他の人々と上手にやっていく方法はただ一つである。それは私たちがそうなるべきだと自覚している人になり，そうすべきであると自覚していることを行い，人を尊び自らも人から尊敬されるにふさわしくなり，主義を曲げることによって自分自身を欺かないことである。

私たちは他人のために自分自身を低くするべきではなく，他人が自分より何かを上手にできるからというだけで自分を他の人より低く感じる必要もない。私たちはそれぞれの考えや才能や資質に恵まれている。もし神がこのように人をお造りにならなかったとしたら，私たちは進歩することができないのである。

ある人が偉業をなしとげると人はこう思いがちである。「何んと偉大な人だろう。私も彼のようになりたいものだ。」しかし本当の意味での偉人はいないのである。私やあなたのような平凡な人々がただ何か偉業をなしとげたにすぎないのである。人々はそれらの偉業をほめるべきである。やる気さえあれば人々はそれぞれの分野で偉業をなしとげることができる。しかしながら人は自分の限界を決めてしまい，目標を定めてそれに到達するとそれで精一杯だと考えてしまう。いつも少しずつ高い目標を定めてそれに向って少しずつ進歩して行くなら自分で限界を決めたりはしない。時々私たちは成功さえできたら幸せなのにとひとりつぶやく。私たちはよく成功と称しているものと幸福とを混同する。成功とは次から次へと欲しいものを手に入れることでも，ただ何かをして手に入れることでもない。それは正しいことを望みそれを手に入れることである。それは正しい目標を望んでそれに到達することである。もし幸福でなければ成功とはいえないし，誠実，努力，愛，自尊心に欠け，人に対する感謝の心がなければ幸福とはいえない。

ランディ・スエンソン（17歳）

正しい道を歩んでいるという自覚が大切であって行為や獲得や到達することは問題ではない。私たちはみな悩みや恐れ，問題などを持っているが，それらをとおして生きることを学ばなくてはならない。私たちが正しい行ないや望みを達成していくときに恐れや問題は必ずある。

アメリカの詩人ロバート・フロストは言った。「私が人生から学んだすべてのことは，次の言葉に要約される。すなわち人生は続いているということである。忘れてはならないことは，道が与えられていて，永続性，があること恐れや憂いはあっても人生は続いていくことである。」

人生それは続く。人生は確かに続いている。そして現在私たちはその人生に直面しなければならない。私たちは思うようにならないからといって悲嘆にくれたり，もう走る力がないといってきらいなものから逃れることはできないのである。

私たちは人生をまっすぐ見つめ，人生を讃え，喜びを見い出し，自分を順応させて生きていかなくてはならない。そしてできることは，たとえやりたくなくてもしなくてはならないのである。私たちは未来に信仰を持ち，最善を尽して行なわなくてはならない。まことに，私たちの未来はすべてそれにかかっている。まことにエバンズ兄弟が言ったとおり，あの私の前にいる人は私自身である。私たちは自分自身へのおくりものなのである。

お金で買えない贈り物

編集副主幹

エリノア・ノールズ

「イエスがヘロデ王の代に，ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき，見よ，東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った，『ユダヤ人の王としてお生れになったかたは，どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので，そのかたを拝みにきました。』……見よ，彼らが東方で見た星が，彼らより先に進んで，幼な子のいる所まで行き，その上にとどまった。彼らはその星を見て，非常な喜びにあふれた。そして，家にはいって，母マリヤのそばにいる幼な子に会い，ひれ伏して拝み，また，宝の箱をあけて黄金，乳香，没薬などの贈り物をささげた。」（マタイ２：１～２，９～11）

マタイ伝の中のこの美しい一節は，クリスマスに贈り物をするという私たちの最もすばらしい習慣の始まりを示しています。

マスメディアと広告の社会，商店への出入りが簡単にできる比較的豊かな社会にあって，贈り物をするということは非常に商業化してきました。受け取る人の身になってよく考え注意深く選ぶならば贈り物はすばらしいものとなります。贈り物をすることによって相手の人の望みをかなえてあげ，大きな喜びをもたらすことができるからです。しかしお金で買うことのできない贈り物をしてさらに大きな喜びをもたらすこともできるのです。それは心の中から湧きでるもの，贈る人の深い思いやりが現われている贈り物です。そのような贈り物はお金はほとんどかかりませんが，最も貴重な所有物で

ある時間を必要とします。これこそまさに，心の贈り物なのです。

たとえば，ある家庭で母親と４人の子供たちがクリスマスの時だけでなく一年中お父さんのことを思っていることを知ってもらうために何をプレゼントしようかと考えました。みんなは一緒になって，家の中でお父さんのためにできること，たとえば仕事から帰ってきたときに新聞を持っていってあげるとか，好きなデザートを作ってあげるとか，くつをみがいてあげるなどのこまごました雑用のリストを作ったのです。母親が近くの店から金銭登録器の紙を一巻き手に入れてくると，みんなはそれを365日分に仕切って，毎日なすべきこととそれを行なう子供の名前をそこに記入しました。こうして毎月，その月の贈り物のカレンダーは子供たちにその責任を思い起こさせるために家の掲示板にはられました。確かにこの贈り物は一年中続きました。

男女共学のある大学では，ほとんど余分なお金を使わないで贈り物の券を作りました。その一枚一枚に，その年にこの券を受けとった人のためになすことが書かれているのです。ある人はルームメートに特別なダンスパーティ用のドレスを作る手伝いをすることを約束し，小さな子供のいる隣人には何回か無料で子守りをすることを約束しました。また年とったおばさんのために使い走りをすることを申し出たのです。

そのような贈り物の券は厚紙や壁紙，白紙のカード，金か銀のインク，マジックペン，図画や切り抜き，詩や引用文，それに色とりどりのリボンがあれば簡単に作ることができます。時間を使っての贈り物には美術や音楽，料理，外国語など熟達しているものを教えるという方法もがあります。また年寄りや身体障害者の人々のために運転手をつとめたり，家庭で作ったケーキやパンなどをプレゼントしたり，休暇のときには隣人や親戚の芝ふを刈ったり，郵便物や新聞の世話をするなど，彼らが家を留守にしている間のことをしてあげるなどがあります。

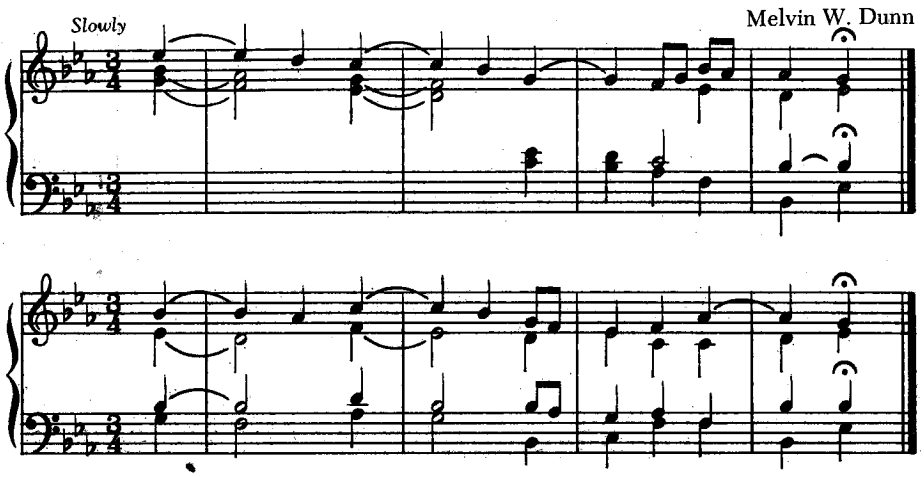
多忙な両親は子供たちに，両親のじゃまをしないで一定の時間自分たちだけで遊ぶことを約束した「タイムカード」を渡すこともできます。家族の記念の書やスクラップブックは，家族にとって特別に意義のある贈り物になるかもしれません。ある若い女性は家族の歴史とファミリーグループシートをタイアップして，自分の兄弟姉妹のためにコピーをとってあげました。これにはかなり時間がかかります。来年のクリスマスのために今からでも始められてはどうでしょう。

心のこもった贈り物は，隣人をひとつにするのに役立ちます。ある末日聖徒の家族はペンシルバニアに引越して行きましたが，そこは他の教会員たちのいる所からずい分離れたところでした。クリスマスイブの日，彼らは手製のゼリーをたくさんびんにつめて明るいきれいな包み紙で包み，リボンをかけて隣人に持って行きました。このクリスマスの時期に接したことによって，たくさんの新しい友だちができ，なかには教会に興味を持つ人もでてくるほどでした。十代の子供たちのいるもう一つの家庭では，クリスマスの前夜炉にたく大きな薪を作る習慣があって，クリスマス・イブにキャロリングをしながら隣人にわけてあるきました。

都市に住んでいるあるＭＩＡの教師は，家族から遠く離れて住んでいる若者たちを招いて，クリスマスの期間中に何度か養老院や病院など，クリスマスの時に寂しい思いをしている人々のいる所をキャロリングしながらまわりました。そして彼らは消防署の人々もキャロリングを聞いていてくれたことを知りました。

材料がほとんどいらないわりに時間はかかりますが，手製の贈り物はいつでも喜ばれます。想像力に富んだ包み紙や入れ物は，たったひと切れのパンやケーキであっても目を楽しませ，おいしく感じさせるものです。

日　曜　学　校

聖餐の聖句伴奏曲

12月の聖餐の聖句

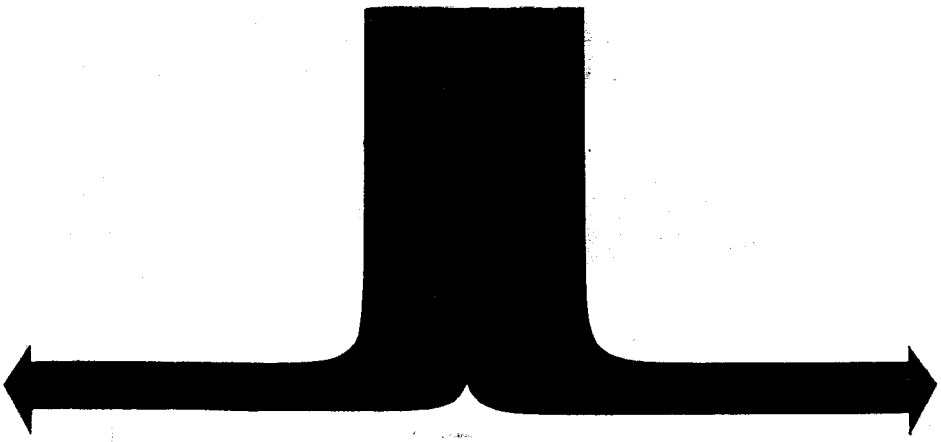
大人日曜学校

「神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで，永遠の命を得るためである。」（ヨハネ３：16）

子供日曜学校

「わたしたちは互いに愛し合おうではないか。愛は神から出たものなのである。」

（Ⅰヨハネ４：７）



だれを信用できるか？

ウィリアム・M・テール

ギリシア神話によると，ヘラクレスは若い時，山の牛飼いと共に住んでいた。ある日，彼は真昼の照りつける太陽のもとで横になり，不思議な夢を見た。夢の中で彼の歩いていた道が突然，はっきりした二つの道にわかれ，どちらをとればよいかわからなくなった。一つの道はとても平坦で歩きやすく，楽しい町に通じているように思えたが，もう一つの道は登れば登るほど困難で険しそうな山道であり，ついには雲の中に消えていた。

ヘラクレスがその二つの道のどちらをとればよいか迷っていた時，一人の若い婦人が町に続く平坦な道を歩いてきた。彼女の上着は色とりどりの花の刺しゅうで飾られ，髪にはバラの花環をつけていた。彼女はヘラクレスがどちらの道をとるべきか迷っているのを見て，町に続いている平坦な道をとるようすぐさま勧めた。「あの町にはあなたがしたいと思っていることを何でも自由にさせてくれる楽しい人たちがいるのよ。働く必要もないし，一日中心地よい庭にいて，泉のほとばしりや小鳥のさえずりを聞けるし，竪琴の音だって聞けるわよ。」

ヘラクレスはその町の方を見た。音楽の音が朝のそよ風にのってかすかに聞こえ，木立に囲まれた家の庭や花をつけた木がとても涼しげにみえ，魅力的だったので婦人の言葉に従ってみようかと思った。しかし，何かが彼を思い止まらせた。

その時彼はもう一の道に立っている別の若い婦人を見た。彼女は質素な服を着て，目は悲しげだったが，りりしかった。「ヘラクレス，私はあなたに真実を話しましょう。私の妹はあなたをだましているのです。あの町で与えられるという楽しいことは，価値のないものでしまいには思いがけないほどに高い代価を支払うことになるのです。あの町へ行ってはいけません。私と一緒に山道を登りましょう。山道は登るのが困難で登れば登るほどつらくなります。でも決してあきることのない喜びがあるのです。胸いっぱいに山の新鮮な空気を吸って，山に登れば，あなたは強くなるのです。もしあなたにこの高い山に登ろうという勇気があれば，この山道はついにはオリンパス山に至り，そこであなたは死なない神々と共に永久に住めるのです。」

夢の中でヘラクレスは賢くも山道の方を選んだ。後になってこの選択はユリシーズによって命じられた十二の難事に挑んだ時に大変役にたったのである。

ヘラクレスの道の選択は彼の人格に似つかわしいものであった。古代ギリシアの人々は，オリンパス山の頂上に達する権利を得て神々と共に住むことを一番望ましい目標と考えていた。ヘラクレスは低いものでは満足できなかった。二人の婦人のどちらを信用すべきか決定する際の決め手は，彼が気高い目的を求めていたということである。

ヘラクレスの話から，二番目の婦人は彼の幸福に心からの関心を抱いていたことがわかる。約束した道は

さらにけわしくなろうとその困難な方を勧めた。彼女は報いを彼に与えることはできなかった。報いというのは自分で得るものである。平坦な道は一瞬良くみえたが，ヘラクレスは二番目の道を選んだ。彼は自分自身を尊重した。二番目の婦人の忠告を聞いて，自己を達成し，進歩，完成してついには神のようになれると感じた。彼女はほんとうに彼のことを考えてくれたのである。

「私はだれを信じることができるか。」という質問に答える時，私達は一人一人について自分で尋ねてみるとがぜひとも必要である。「この人は自分にどんな関心をもっているのだろうか。私が目的を達するよう望んでいるのだろうか。それとも失敗や悪への道連れを捜しているのだろうか。神の律法を私に捨てさせようとしているのか。私に両親や家族の面目をけがさせようとしているのだろうか。私がいつも大切にしている主義に疑いを抱かせようとしているのか。彼は何をしようとしているのか。」信頼のおける人は私たちが定めた目標に一致した目的をもっていることは明白である。

これによく似ているのが生徒たちの望みに反し自分の目的を満足させようとしている教師の例である。人生において私たちは疑わしいことを教えこもうとしている人たちと接することがある。不幸なことは，不和の種をまいたり，若者の素朴な信仰をこわして満足している人が多くいる。学校は学ぶ場であり，若い探求心にあふれた人々をのばす場である。

生徒たちは先生を信じたいと思っている。このことは私たちについても同様である。しかし生徒たちが学校ですら，イデオロギーに反対する権利があることを自覚させることは大切である。普通，生徒たちは先生を選ぶことはできないが，先生の言っている能度や好み，考えを選ぶことはできる。

アルマは「だれを信じることができるか」というこの質問に最も信頼のおける解答を与えている。

「また誰であっても神の心にかない神の道を歩み神の命令を守る者でなければ，その人を信じて教師または教会の指導者にしないようにしてほしい。」（モーサヤ 23：14）

天上の会議で一つの霊も失わないと約束した計画がだされた。地上にあってヘラクレスの夢の町に象徴されているように，すべてのものが与えられ，仕事も努力も何ら要求されず，支払うべき代価は都合よく無視されるというのである。

二番目の計画では，個人は選択の自由を持っており神への道を教えられ，それを目ざすか否かは個人の自由にまかされている。その道は決して易しいものではないが，それを達成した者は永遠の生命を得，神になることができる。２番目の計画の大切な点は自分で選択する自由意志であった。

「そして時が満ちると，人間の始祖の堕落の結果から人間を贖うためにメシヤが来りたもう。人間たちはその始祖の堕落の結果から贖われるから，すでに永久に自由となって善悪を弁え，ただ大いなる終りの日に神の下したもうた命令に従って律法が定める罰を受けるほかには何事も自分の心のままに行いほかから強いられることはない。それであるから，人はみな現世に於て自由であり，およそ人間のためになるものは何でも与えられる。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか，または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから，その束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか，これは全く人間の自由である。」（Ⅱニーファイ２：26，27）

たとえあらゆる助けが与えられたとしても神への山を登ることは自分でしなければならない。最も信頼できる人はあなた自身なのである。私たちは一人一人神の導きをうける権利はあるが，みたまのささやきを聞くにふさわしくなければならない。この点に関してブリガム・ヤングは秀れた洞察を与えている。

もしあなたの信仰が正しい目的に向っており，確信に揺るぎがなく，生活が清く，あなたに与えられた神権や能力によって召しの義務を果すなら，あなた方は聖霊に満たされるであろう。そしてあなた方が欺かれ破滅に落入ることは，羽毛が火の中で燃えずに残っているのと同じく決して起こり得ないのである。

故 デビド・O・マッケイ大管長

この日,

世界中の祝日の中で，クリスマスは最も広く受け入れられ祝われるようになっている。クリスマスにはうら若き青年男女，よちよち歩きの幼児から晩年を迎えている老令の哲人まですべての人に訴える独特な何かがある。クリスマスは，完全に利己心が忘れられ，ものを得たいという強い気持は親切や許し，寛容や愛の精神にとってかわる一年中でただ一度の季節である。これらの数々の美徳がこのお祝いの季節をこのように楽しくさせるのである。現在では，キリスト教徒のすべての町はクリスマス・イブに人がつくった明りで輝いている。しかしおよそ2千年前のベツレヘムのクリスマス・イブは，3つのたいまつの火があるだけで，暗かったにちがいない。しかし，最初のクリスマスの物語が予言されていた歴史的ではあるが謙虚な町に世の光（ヨハネ8:12）がお生れになったのである。

最初のクリスマスのおとずれはかつて告げられたこともない最もすばらしいものであった。（ルカ2:7—26）なぜなら「喜びのおとずれ」といわれた永遠の原則が宣言され「すべての人々に」もたらされたからである。世の光はすべての人々の心を照らすこととなった。ベツレヘムの幼子の誕生に関連する出来事は，この事実を美しく説明している。旅に疲れ果てたヨセフとマリヤがなつかしい故郷の町ベツレヘムに着いたとき2人は宿をとり疲れを休めようと思ったが宿屋にはかれらの入る余地がなかった。

ヨセフとマリアがその宿屋を去ってどこか他に休む所を捜すため再び闇の中に戻っていった時のマリアの非常な落担と不安を理解できるのは，母親の経験を持つ人のみである。その町は多くの人々で混み合っていたが，ヨセフとマリアの重くさびしい気持を和らげる顔見知りの人も助けてくれる友もなかった。身ごもっている母親には最も安心して休めるところが必要であったがドアは開けてもらえず身をよこたえる休息の場さえもなかった。

あなたに

啓示を受けた謙遜な羊飼いたちは，マリヤとかいば桶に寝ている幼子を見つけた。東方の博士たちは知識により幼子のところに導びかれてやってきた。8日後にマリヤがモーセの律法に従って幼子を神殿につれていった時，シメオンにはこの幼子が「主キリスト」であるとわかった。

このようにして最初のクリスマスに，謙遜な人も博学の人も，富める人も偉大な人もまごころから求める人はみなキリストを見いだし神の国の兄弟姉妹として一つになるということが示されたのである。

「この日，あなたに」とって，そして私にとって，イエス・キリストは救い主となるのである。救いはまことに個人的な事柄である。イエス・キリストの教会の中で私たちは個人として働くのである。信仰，悔い改め，バプテスマ，按手礼そして他のすべての福音の原則と儀式は，皆個人のためのものである。

クリスマスの真の精神はキリストの精神である。

主の誕生の天よりの知らせは，世紀を通して光をもたらしている。「いと高きところでは，神に栄光があるように，地の上ではみ心にかなう人々に平和があるように。」

キリストが低い身分として世に生れ出た時宿屋には居る場所がなかった。今日，すべての家々のすべての人々の心は主を喜んで迎え入れるであろう。もし真実そうであるなら，利己心，ねたみ，敵意，そして不幸を招くすべてのことが親切や心からの奉仕や善意にとって変えられるだろう。世界に平和を確立する責任は国々だけでなく，すべての個人，家庭，村，町にもあるのである。

このゆえに個人個人が，本当のクリスマス精神を心からのものにしようではないか。そして個人個人の家庭にその精神を広めようではないか。そのような幾千の家庭のあるところこそ，まことのクリスチャンの町であり，そのような幾千の街のあるところこそまことのクリスチャンの世界である。

〈日本東伝道部だより〉

岩見沢伝道所　岡　村　雅　博

私たちが当教会員になるための門として，バプテスマが用意されてあり，それを受けるときに信仰に対して証ししなければなりません。つまり自分がバプテスマを受ける資格のあることをここではっきりと証明し，真理を証明します。しかし日がたつにつれ，この真理も我々凡人にはあたりまえに思え，新鮮さが失われていきます。そして私もその例外ではありませんでした。

私はまだ学生であり，比較的自由な生活をして居ますが，学校で所属しているクラブは，旧態依然たる封建的なものです。年に２，３回金を出し合いコンパを開きますが，その席でかならず先輩が酌をしにくるし，まあ，始めのうちはなんとかごまかして酒を飲まずにいますが，その場の雰囲気で，つい一杯ぐらいならと飲んでしまったことがございます。次の日，自分の弱い信仰を悔やみ，もう教会へ出席するのをよそうと思いました。しかし自分自身に逃げるなといいきかしその日の日曜学校に出席しました。ちょうど証詞会のある第一日曜日であったので，そのことを皆さんの前で証しともつかないような話をしました。すると不思議なことに前より証しの強くなった自分を見たのです。私は寄り道したことを悔い改め，これからの信仰生活にこのことを強い戒めとしました。

信仰生活を送る内にかならず一度や二度のつまづきはあります。しかしそのことで教会を去るようでは始めから信仰する資格はありません。それは信仰の形をとっているだけに過ぎないと思います。いろいろな困難を乗り越えてこそ，真に強く生きる証しを得，またそれは価値のでるものとなりえます。どうか困難なことにあったら，試しと思いぶつかっていって下さい。それを越えるとまたちがった世界が眼前に広がっているのを見るでしょう。また今までの何んということもない聖句が大きな意味をもっていたことに気がつくでしょう。私には，いたるところに試が用意されているように思われます。それを打開することにより，弱い証し，波のある証しをより高い位置にもってゆけるということを忘れないで下さい。

岩見沢伝道所　高　橋　厚　子

私がこの教会に通うようになって二か月が過ぎ去りました。教会に入ったきっかけはある事で友だちにうらぎられ，嘘をつかれ，人間ってどうして嘘ばかり言うのだろう，もう何もかも信じられない，自分の心にそう思っていた時に，姉から教会の話を聞き，教会に入ったら少しは心が和らぐだろう。そう思ったら，やっぱり信じる事って大事ではないか。それでは神様を信じる事から始めよう，そして自分の心を直す事ができたら，そう思って教会へ行く事にきめました。

始めは内容もよくわからず，モルモン経という本を読んでも，よくわからなくて，こまってしまいました。でもバプテスマという目標に向ってレッスンを受けるようになってようやく，だいたいの意味がわかりかけてきました。バプテスマそれは素晴しいものでした。生まれて初めて聞き，そして自分の肌で感じた時には，何か今までの自分でなく今まで以上に幸福への確実な道を得たように思いました。

イエス・キリストを信頼する事が一番の幸福の道であり，イエス・キリストを信じている人々は，心に平和を持っているように感じます。信じる事のできない人，信じる事をおそれる人は，きっと幸福が得られないでしょう。信じられない人々に一度ためしてみなさいと言いたい気持ちです。私はそんな人々に，今の私を知ってもらえたらどんなに素晴しいかと思います。

イエス・キリストが十字架で死なれ，三日目にもう一度復活された事を私は知っています。そして私はキリスト教徒だと思っています。聖書を読み祈りをしています。そして自分が罪人である事を認め自分は神様のさばきにあうべき者だとそしてキリストが私の身代わりになって死んで下さったのだと信じます。救い主としてイエス・キリストを受け入れます。私のすべての罪を許して，私の心を入れ変えて永遠の生命を与えて下さるよう信じます。私は喜こんでキリストを私の救い主として証詞します。そして何事にも一番大切な事，それは信仰です。

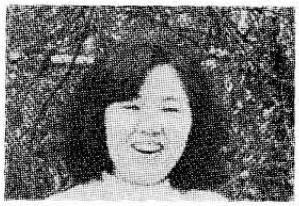
最後に皆様に聖霊の賜物がいつでもあります様お祈りして私の証詞と致します。

新伝道地

主の御業は，この地にも，大きく発展しています。８月につづいて，新しく，諏訪と，大宮に伝道地が開かれ，宣教師が派遣されました。これで，伝道部内の20の市で福音が述べられています。

新しい伝道地は，非常に，発展が早く，８月に開かれた小田原，沼津ではすでに10名以上の兄弟姉妹がバプテスマを受け，毎週20名以上が集っています。浦和でもすでに40名近くの人々が日曜日に教会に集っています。「主の御手は今や，この地の上にあり……」御国のために，宣教師たちと会員たちが一つになって，がんばっています。

日本伝道部



われらの 710人目

10月25日，それは日本伝道部において特別な日でした。それは，1970年度の710人目のバプテスマとして，本田よし子姉妹（新潟支部）が誕生されたからです。この数字は昨年度，現在の日本東伝道部が一緒であった時のバプテスマ総数と同じになり，主の御業が，大きく発展しています事を証詞しています。

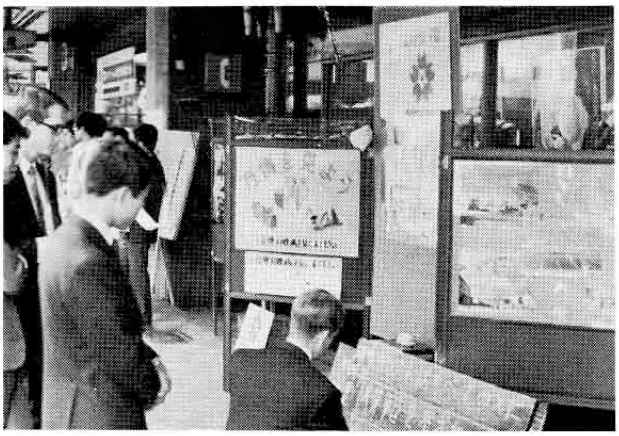
富士宣教師大会開かる

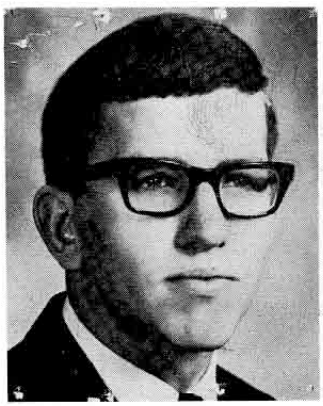
美しい富士山を背にした，富士ハイランドパークホテルにて，11月５日より７日までの３日間，ブルース・R・マッコンキー長老（七十人最高評議員）を迎えて，熱のこもった宣教師大会が行なわれました。

144名の宣教師たちは，大会の間中，美しい富士山の姿に，また，すばらしいマッコンキー長老御夫妻，ビルス伝道部長御夫妻のお話に，あふれるばかりの感激と，霊感を味わったのでした。

富士山を背にした，144名の宣教師たち

〈日本中央伝道部だより〉





〈万博〝紹介車〟各地を巡回〉

万博で大成功をおさめ6,600,000人の訪問者を受けたモルモンパビリオンを再度日本各地の人々に紹介しようと日本中央伝道部のリーマス長老と工藤長老がステイションワゴンに映画フィルム〝幸福の探求〟を積んで各地を回っている。宣教師たちが神戸を10月初旬に出発して以来すでに四国の松山，高松，高知各支部金沢，小松，姫路，岡山，東大阪，守口，阿倍野，和歌山，岐阜，名古屋，名古屋北支部，岡崎支部の各支部を巡回し，2,000人以上のリフェローを取っている。内容は万博で紹介したモルモン館での説明並びに映画を街頭で行い，福音を世の人々に知らせることであるが，すでに石川テレビのニュースでブラウン管を通して紹介されたり，各地ローカル新聞に写真入りで紹介されている。

〈日坂繁姉妹オナラリー・ゴールデン・グリーナー賞を受く〉

ＭＩＡでは毎年各伝道部，ステーキ部より男女，一名づつ若い人たちのための教会活動に尽した45歳以上の活発会員にオナラリー・マスター・Mメン(男)，オナラリー・ゴールデン・グリーナー(女)賞を与えている。

昨年度は柳田聡子姉妹，周藤珠彦兄弟が栄えある賞を受けられたが本年度は名古屋の日坂繁姉妹に名誉ある賞が授けられた。日坂姉妹は今から17年前の1953年にバプテスマを受けられて以来ずっと若い人々の活動を援助してこられ，支部の人々から愛され親しまれ，絶大な信頼を受けている。

〈伝道部補助組織合宿ワークショップ〉

去る10月31日～11月１日にかけて中央伝道部の補助組織強化合宿，トレイニングが能勢のキャンプ場で行われた。プログラムは10月31日(土)は親睦会，11月１日は朝７時より15時まで断食でギッシリと詰ったプログラムの下でトレイニングが行われ，新らしいプログラムの研究が行われた。最後の聖さん会断食証会では全員の力強い証を述べ，多大の成果の中に閉会された。都会の雑踏を離れて二日間，静かな山中で霊的な雰囲気の下で行われたトレイニングで神様の愛を身近に感じ，とても価値あるものであった。

〈ハーモン長老，天に召される〉

去る11月29日(日)名古屋北支部にて奉仕されておりました。

ハーモン長老が，シャワー中に突然，心臓麻痺で急死されました。ワシントンにてステーキ部長会のメンバーであられる信仰深い父と母を持つ家庭で育てられ，1969年６月19日に日本中央伝道部に配属され，１年５ケ月間とても熱心で信仰深い優秀な宣教師として神の王国建設のために献身的に奉仕されておりました。

悲しみの中にも，我が息子に対する誇りと希望の念をこめて，ハーモン長老のお母さんは国際電話で次の様に話されました。

「私の息子は学業成績も良く，神様の仕事も一生懸命致しておりました。人に一度生を与えられるのも，また一度だけ死を与えるのも，すべて神がなされます。きっと霊界で，日本人のために日本語を立派に話す息子の働きが必要になったので召されたのでしょう。」と，私たちはハーモン長老の生前の献身的な働きに心より深く感謝を致しますと同時に，御家族の皆様に謹んでお悔み申し上げたいと思います。

〈日本西部伝道部だより〉

バ　ザ　ー

秋の気配が色濃くなる頃，聖徒たちは支部の計画にその実施にいっそうの主の導きを感じ始めます。いくつかの支部はバザーを催しました。聖徒たちは会場の設置に，食事の用意に，心をひとつにして集って来ます。

広島支部では一風かわった，かわいらしいまくらを出品しました。

熊本支部では満ち足りた楽しい食事ができ，素敵な装飾品が販売されました。

福岡支部の神権者たちはアメリカン・アップルパイを作るという，愉快なひと時をすごしました。(200個近いパイがまたたく間に売り切れてしまいました。)

食事は素晴らしく，ぜんざい，お好み焼き，ホットドッグなどたいていのものがそろっていました。聖徒も求道者も，近隣の友人たちも楽しくすごしました。

長崎支部の扶助協会会長奥村美保姉妹はバザーの価値について次のように語っていました。

「バザーは共通の目的をもって働くよろこびを気付かせます。バザーの成功のために協力を求め合いながら共に働く，これによって支部の会員の強い結束を期待することができます。また教会を知らせる良い機会であり，そうすべきときです。そして，バザーは新しい会員たちとの交友のための素晴らしい機会です。」

訪問者センター

11月３日，訪問者センターは新しく映画館として開館しました。この建物は10月のおわりまで，臨時の施設として活動していましたが，その間，何百人という人々が展示や映画『幸福の探究』によって教会を知りました。

映画館として活動する最初の日，200人以上の人々が迎えられました。

12月までに展示などの装飾も完成し多くの祝福された改宗者を得ることができるでしょう。

昭和四十二年十二月十八日第三種郵便物認可
一九七〇年十二月二十日発行（毎月一回二十日発行）第十四巻第十二号

「我が日々をいたずらに費やすまい…」

リチャード・L・エバンズ

ある感動的な言葉の中で、ジャック・ロンドン[1]は人生の充分な活用に関していくつかの態度を挙げている。「私は塵であるよりは灰になりたい。くされた木に、くすぶり煙るより、輝く炎の中に燃え尽きたい。ぼんやりした永久の惑星であるよりは、閃光を発して消え行く流星でありたい。人の目的はただ存在するにあるのではなく生きることにある。我が日々を引き延すべく、いたずらに費やすまい。」

人々が定める時の仕切りは必ずしも絶対的なものではなく、人それぞれにより異なり、また自身の心のあり方によっても異ってくる。世の業は決して終ることがない。無気力に、時が過ぎ行くのをただ待っている人を見るのは悲しい。年数、時計、カレンダーが問題ではなく、めいめいが最善を尽し、最善をつくしていると感じ、全生涯を有益に最善を尽して生きることが問題である。物質的な成果ではなく、精神的、霊的なこと、奉仕によって豊かになる判断力と経験とが問題である。「青春が人生で最も幸福な時であるという考えは詭弁である。最も幸福な人とは人生に最も興味を抱く人である。」とウイリアム・ライオン・フェルプス[2]は言った。また哲人セネカ[3]は「賢人は、人生に関して常に量より質のことを考える」と言っている。人生は、我々を静かに、しかも確かに押し流す流れに似ている。現在もまた永遠までも我々を動かして留る所を与えず、生涯を通じ、人のなりうる状態、人のなしうることを得させて流れる。

「人生の仕事はひとりでに進み行く。」とサムエル・ジョンソンは述べている。

「私は塵であるよりは灰になりたい。くされ木にくすぶり煙るよりは、輝く炎の中に燃え尽きたい。ぼんやりした永久の惑星であるよりは、閃光を発して消え行く流星でありたい。人の目的はただ存在するにあるのではなく生きることにある。我が日々を引き延すべく、いたずらに費すまい。」

1．アメリカの作家（1876—1916）
2．アメリカの教育者（1865—1943）
3．ローマの哲学者、政治家、（4 B.C.—65 A.D.）

聖徒の道
1970年12月20日発行
振替口座　東京16226番
発行人兼編集人　ウォルターR.ビルス
発行所　東京都港区南麻布5－8－10
末日聖徒イエス・キリスト教会　電話（442）7459
印刷所　太陽印刷工業株式会社
定　価　100円
予　約　一年間 1,000円（外国4ドル50セント）
電報受信略号　「トウキョウ」マツジツ